

---

# 学園默示録 HIGHSCHOOL OF THE DEAD-黒い鶴鳩-

インフル

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

学園默示録 HIGH SCHOOL OF THE DEAD

黒い鶴鳩

### 【Zコード】

N7471U

### 【あらすじ】

さえない大学生が大学へ行く道中、乗っていた電車が脱線事故をおこす。不幸にも先頭車両に乘っていた彼は車両ごとつぶれる。そして死んだかと思ったら神と名乗る男の人に力を与えられ、転生する。

しかし転生した世界がなんとH-O-T-Dの世界だった。  
そんなリアルバイオの世界を彼はどうやって変えて行くのか・・・

No.04 (前書き)

鴉羽様と冴子先輩が好きすぎて書いた。  
反省はしない。  
後悔もしない。

それは約4時間ほど前のことだった、たぶん。

? ? ? side

たいして頭もよくなく、むしろ悪い部類に入っていた高校時代の俺は某都内の早い稲の大学に当時付き合っていた女子と一緒にいたいがために猛勉強をして受験した。

別に今時彼女と一緒に大学に行きたいとの理由から同じところを受けたとしてもおかしいことでも何でもない。むしろ大多数はそういうはずだ。

だから、当時お世辞にも優秀とは言えなかつた俺の勉強を非常に頭のいい彼女に見つめられた。

勉強を見つめられた俺は自分の努力もあってか、志望大にもしかしたら受かるかもといつとこりまで来た。

彼女は優秀だから自分とは違つて難なく受かるだろう。そう思つていた。

そして一次試験は二人とも難なくクリアし、センターに駒を進められた。

センターは厳しかったが、ギリギリでなんとか通れた。本当に1点や2点差の違いだった。

しかし、ここで彼女がセンターを落とした。

原因は英語科でのスペルの間違いと書つ。ケアレスミスだった。

彼女は気丈にも来年があると言つた。その時俺はどう言葉をかければいいのか分からず、ただ彼女を抱き締めた。静かに彼女が泣き止むまで。

その後俺は無事入学し、彼女も1年後には無事に入学してきた。

学期が違つたが、それでも俺たちの関係は変わらず、むしろ深くなり、卒業後には結婚を考えていた。そしてさらに1年が過ぎた。

今俺は大学に向かっている。これから講義があるからだ。

ちなみに彼女とは同棲しており、ナニも一応した。そして彼女は講義が午後なので今は一緒にいない。今は上野のキャンパスに向かって電車に乗っている。

? ? ? side end

ああ、確かにその後電車は脱線事故を起こし、運悪く先頭車両に乗っていた俺は事故で車両ごと潰れたんだった。

『やつと回想が終わったか?』

突然後ろから声が聞こえた。

「誰だ?」

『驚かないんだな』

そこには一人の男の人があった。

「後から気配もなく声をかけられるのはなれてるからね」

『そうか。所で、今自分がどんな事態に陥っているのかを正しく認識できるか?』

「……電車事故で死亡し、今は天国か地獄に行くのかを待ってるんじゃないのか?」

『ま、死んでいることを自覚していれば上出来だな。そうだ君は死んだ』

『まさか、間違えて殺してしまったとか。そういうことは言わないだろうな?』

今ネットで流行ってる一次創作のように神が間違えて殺してしまつ

て、いろいろ便宜を図つてもらつて、違う世界へ転生をせん、なん  
ていうことじやないだうな。それでは非常に困る。

『心配するな。確かに君は死んで、これから私が転生をせよつとし  
ているが、決して誤つて殺したからではない。君の死は必然だつた。  
あの時が君の寿命だ』

「ではなぜ、ここに? そしてここが死んだ?」

わざわざから氣になつたことを聞く。

『ここはどこでもない。そして何故君なのかはといふと、それはた  
またまた』

「たまたま?」

『さうだ。実は世界創造には君たちがビッグバンと呼んでいる、プ  
ロセスが必要で、分かりやすく言つと、核爆弾が質量をエネルギー  
に変えるというのならビッグバンといつのはエネルギーを質量に変  
えるといふことだ。そこでエネルギーを込め過ぎてしまつてね、い  
ささかまことにになつた』

「とこいつと?」

ただの一般人である私に世界などビッグバンなどといわれてもスケ  
ールが大きすぎて理解が出来ない。

『まつたく同じ世界が二つ生まれたのだ。世界といつのは無数あり、  
それは一つ一つ違つて同じものは無い。だがここでまつたく同じ世  
界が二つ生まれたといふことだ。これは非常にまことにで、一言

で言えば、すべての世界が滅びる。

しかし、そこに『イレギュラー』を投入すれば問題はなく、投入された方はやがて変化し、世界はまた違つてゆく』

「そのイレギュラーが私といつのか?」

『そつだ。いくら神といえど、勝手に人の生死には介入できない。だから、死ぬことが決まつていて、なおかつある程度成長した人間を転生者といつイレギュラーとして、世界に投入するによつて世界を変えてもらひ』

「誰でも良かつたといつのか? なら何故私を『だからたまたまだ』

・・・そつか

私の死は決まつていたのか。これはきついな、まだ神に殺された方が救われ、いや、どの道彼女を悲しませるか。

『大丈夫だ。たいしたことは出来ないが、出来る限り彼女が不幸にならないようにすると約束しよう、そして時間が無い。これから行く世界を変えてもらつための力をいくつか用意した。これらのなかから選べ』

セキレイ・鶴鶴N O · 02 松

セキレイ・鶴鶴N O · 04 鶴羽

セキレイ・鶴鶴N O · 05 陸奥

セキレイ・鶴鶴N O · 08 結女

・・・・・いや、確かにセキレイは好きだよ？ 高校時代の友人に進められて見てみたら思いのほか面白くていろいろとミニックとかアニメとかも見たけど、さすがにこれほどいつなの？

『どうした？ 早く選ばないか、時間が押してくる』

「いや、あの・・・これだけ？」

『さうだお前が一番好きな作品から好きなキャラを選んだ』

そりやあ確かにこのどれも好きなキャラだけど、だからってこれはどうかと、あとその他の問題などもあるし、それにいくら好きでもキャラそのものになるのはさすがに・・・

『心配するな。お前が転生したことによって本来誰かの運命を狂わせることも無い、誰かをのつとることも無い。そりでなければ転生の意味が無い。』

それにこの選択肢はキャラそのものになるのではなく、キャラの能力を元に君の無くした体を再構成するもので、君はそのままの君で、キャラになることは君が望まない限り無い』

そういわれて、ならばと思つてしまつのは仕方ないと思つ。  
男なら誰しも一度は夢見たことがある特別な力を貰つて勇者になる、などという状況がいまの自分にあるのだ、興奮するのは当然だと思う。

『さあ、早く選べ。君の彼女には君の死で悲しまないよつ細工をしておくから』

「分かりました。彼女のことをせがむ願いします」

そういうて私は五つある選択の一つを選んだ。

『なるほど、これが。では時間もまじめに無くなってきた。さつと送るぞ』

そういう、私に両手を向けて神とやらが手を光らせて、私の意識はどんどん薄れていった。薄れていった意識の中私はただ彼女が早く私のことを忘れて幸せになってくれることを祈った。

## No.04 (後書き)

早い稲大学はオリジナル設定入り。  
実は作中の彼女はH-O-T-Dの世界では冴子先輩にあたる人。

**黒い鶴鳩（前書き）**

ダイナミック原作壊し?  
むしろ原作レイプ?

・・・ いえ、ただのクロスでした。

私は転生した。

何を言つてゐるのかと、頭を疑うかもしぬないがこれは本当のことだ。大學3期生だった私は大學へ行くために電車に乗つていたら、脱線事故が起こつて、運悪く先頭車両に乗つていた私は車両ごとつぶれてしまつた。

それで、死んでしまつたと思つていたら、突然神とやらに力を与えられた世界を教えてくれと言われ、彼女のことが唯一の心配だつた私は最初ためらつてはいたが、出来る限り不幸にはならないよう便宜を図つてくれると約束してくれたので、決心がついて、力を貰い転生させてもらつた。

そして私の今生の名前は鴉羽夏男といつらしい。

なぜらしいのかといふと、それは今私は赤ん坊だからだ。

そう、また人生を一からやり直しである。

これを知つたときは少し落ち込んだ。とは言つても30分ほど前のことではあるが。

そして、私の名前から分かつた人もいると思うが、私は『セキレイ』

『鶴鴎ノ〇・〇4 鶴羽』を選んだのだ。

他のシングルナンバー や第3期懲罰部隊の紅翼の能力もいいが、日本男児たるものやはり刀を使ってみたいというのはある。むしろ私にはそれしかない。確かに松の『覗き』は魅力的ではあるが、刀には敵わなかつた。

そして6年が経ち、今は6歳。

神はどうやらいろいろと便宜を図つてくれたようだ。

私の姓が鶴羽であるように、両親もまた鶴羽である。鶴羽家は京都にある戦国時代から続く、武家であり、直系の末裔は当時から脈々と受け継がれてきた剣術を必ず習う。そして直系の末裔は当代の家長に認められれば、鶴鴎と名乗り、鶴鴎と名乗つた人は家長になるという慣例が無形文化財として現代に遺されている、帯刀許可も無条件で下りるらしい。そして何より古代のセキレイの末裔である。

何故このような手の込んだことをするのか疑問に思つていると、頭上から手紙が突然ひらひらと落ちてきて、そこには鶴羽の能力といふことは当然羽化が出来るということで祝詞も羽化したら、使えると書いてあつた。そして体の構造は人間よりもセキレイに近く、むしろほとんどセキレイらしい。そうすることで私のこの能力は先祖帰りといつことで一応の説明はつくとのこと。

そんな私は今京都にいる。

何をしているのかといふと、今は『鶴鴎』の襲名をしに京都の本宅にある大広間に来ている。6歳での襲名は前代未聞の偉業のこと。

ちなみに鴉羽人は私がセキレイだということを知らないし、そもそもセキレイの存在 자체しらない。

「いや、説明してる間に襲名は終盤を迎えたようだ。あとは歴代の家長になり、名を鴉羽夏男改め鴉羽鶴翁夏男となつた。

そして、太刀が私の手に渡された。これで私は名実とともに鴉羽家の家長となり、名を鴉羽夏男改め鴉羽鶴翁夏男となつた。

夏男 side

4歳になつてすぐに始まつた剣術の修行だが、私は神から貰つた鴉羽様の能力なのか、初めて刀を握つたときはやけにしつくりと手にじんだ。本来なら3キロほどもある鉄の塊はまだ4歳の私には重くてもないはずなのに羽のように軽かつたのは覚えている。

そしてその後も鴉羽様の能力により、刀の扱いは日に日にうまくなつて行き、半年ほどもたてば、父を圧倒できるようになった。そんな私は周りから神童だの鬼才だのとちやほやされた。あまりいい気分では無いだけは言える。

そして、ふと気付けば田もどんどん細くなつていて、なぜか両親共

々黒髪なのに私だけは白髪に近い銀髪で、肌の色も白い。ぶっちゃけていうと、鴉羽様の容姿そのままである。鴉羽様をそのまま男にしたような見た目に私はなっていた。

5歳になつた今日、私は父を相手に剣術の修行をしていた。もう今では片手間でも父に勝てる。怪我をまったくしないし、したとしてもすぐに塞がるし、真剣を使つた修行での結構深い切り傷もいつの間にか治つていて、鴉羽様のチート性を再確認した。

今休憩中の私は突然父に呼ばれた。何事かと思つたら、どうやら今日は父の知り合いが来るらしかつたが、私はまったく聞いてない。だから、突然見知らぬオジサンが綺麗な女の子を連れてきたときに何事だと思つて固まつてしまつた私は悪くはない。

「ほら、夏男。挨拶をしないか」

父である、鴉羽隼人が言つてきた。

「あ、はい。どうも、初めまして、鴉羽夏男です」

そしたらオジサンは自己紹介し、娘を紹介した。

「初めまして、毒島汎子です」

これが私が彼女の出会いだつた。

その後で知つたことだが、毒島家は鴉羽の分家だとか。

冴子とは同じ年だったらしく、その後も冴子とは時々遊んだり、剣術修行をしたりして、今ではお互いを名前で呼び合つ仲になつている。

襲名も終わり、今は冴子と一緒にいる。なぜいるのかと言つと、本家の襲名に分家の冴子は当然来なければならず、ここ京都の本宅に居る。ちなみに冴子とは許嫁であり、婚約済み。

そしてやはり私にはあつた鶴鴎基幹が冴子と竹刀を打ち合つたびに、今はそんなに強くないが、しっかり反応して居るのがわかる。

なぜ竹刀を打ち合つたびなのは最初私も疑問に思つたが、最近なんとなく鴉羽様の力に引っ張られているのでは、と思つよつにつた。

襲名が終わり、家長になつた私はこれから冴子と一緒に床主市にある屋敷に向かう。

え？ 家長なのになぜ本宅にいないのか？

私はまだやつと小学生になつたのですよ？ 家長としての仕事は当然やらせてももらえない。

襲名はしたが、まだ実質的な家長は祖父にある。

ならなぜ今襲名するかは、それはただジジイと手合わせをしたら余

裕で勝つてしまったからだ。だからこそ6歳何て言つ年で形式上家長なんものになってしまった。

権力移譲は成人のときに行われるらしいが、形式上とは言え家長だから公式の場には一応出なければいけないらしく面倒くさい。こうなると分かれば興味本位でジジイとはやらなければよかつた。

そして私と冴子は無事にこれからを過ぐす床主市屋敷に到着した。

## 黒い鶴鳩（後書き）

とりま原作が始まった時に、鴉羽本宅にいた人は全員無事設定。

そして鶴鳩就任は実は・・・

## 羽化とともにか出でる（？）（前書き）

セキレイのネタバレが多分に含まれております。  
そして都市生存フラグ。

## 羽化とまわか出会い(?)

時は流れて今私にとつての二度目の高校1年生。最近鴉羽様に似てきたことがもつぱりの悩み。

そして髪も冴子が切らせてくれなくて、今は腰あたりまで伸びた銀髪をうなじあたりで一つにくくつてる。まんま鴉羽様だ。さらに、本宅に何故か懲罰部隊の服があった。鶴鴨紋もちゃんとついていた。とりあえず貰つておいたけど。

で、たまに懲罰部隊の服を着てみたらまんま鴉羽様で、それを冴子に見られてしまった。という小3のときの話。

それから髪を切らしてくれなくなりた。曰く、髪が長いほうが似合うのだそうだ。そりゃあ鴉羽様の容姿だから長髪は似合つだらうけど。

あ、そういう。これは言つておかなければ、私、羽化しました。葦牙は当然冴子です。

事の発端は中2の時。

剣道部に入つていた冴子は剣道部の用事があつて私だけが先に帰りました。そして剣道部の用事が終わつて帰つてきてくる途中で強姦魔にあい、その時に持ち合わせていた木刀で強姦魔の肩甲骨と大腿骨を折りました。

警察に伴われて家に帰ってきた冴子はひどく怯えていて、何かを恐れているようで、見ていて非常に痛々しかったというのだけは覚えています。

最初は強姦魔に襲われたことに恐れているのだと思ったが、すぐにそんなことで悩むような人ではないと思い出し、問い合わせたところ、ひどく怯えていた表情で心のうちを語ってくれた。この時に何故か鶴鳩基幹が急に反応した。今までに無かつた強い反応だが、それに耐え、痛々しい冴子をやさしく抱きしめて、自分のことを説明した。

鶴羽は太古のセキレイの末裔であること。

自分はその先祖がえりで、人ではなく、セキレイであること。

自分は羽化することにより祝詞が使え、人には想像もつかない力を振るえること。

自分には葦牙という存在が必要不可欠のこと。

そして何よりも太古のセキレイの争いのこと。

それらを全て冴子に話した。

いくら鶴羽で、婚約者だからといつても、全てを言つてしまえば恐れられて拒絶されてしまうかもしないと思うと、正直怖かった。だが、そんなことも冴子の姿を見れば全て吹き飛び、気付いたら逆に冴子に抱きしめられ、幼子のようにあやされていた。

「ありがとう夏男。こんな私でも受け入れてくれて、認めてくれた。私はお前に救われた。本当にありがとう。たとえ、夏男がどんな

であるうとも、人ではなかうとも、こんな私を認めてくれた夏男のそばを離れることは無い」

そういう私と冴子は唇を合わせた。

こうして私は羽化した。

そういうば、羽化した直後のことだが、第19代目鶴鳩として京都の本宅に帰つたときに偶然本宅の蔵で奇魂くしみたま、いわゆる神器を見つけて。しかも8つ。

そしてここに8つあるといふことは原作セキレイとは違つて、嵩天からは無事8隻の船が降りて、8人の女神と856体のセキレイが奇魂をめぐつて互いに滅ぼしあつたといふことで、鶴羽様とその葦牙が最後まで生き残つて、その末裔が私ということになる。

神器が8つあるといふことは他のセキレイは鶴羽様もしくはその葦牙によつて機能停止されていると考えていいと思つ。おそらく鶴羽以外でセキレイの末裔はいないだらうといふことも。

それらのことも冴子に伝えたが、そうかの一言で終わらせられた。

羽化後は冴子の剣を見たり、学校終わりに手合させしたり、剣道の全国大会の応援に行つたりした。もつとも、全国大会の時は19代目鶴鳩であることがばれて一悶着があつたりした。

そして、中3のときに最も驚くべき事があつた。

川神市があつたのだ。

どうやら鴉羽の鶴鴎というのは意外と有名らしく、その鴉羽の鶴鴎を6歳のときに襲名した私は川神鉄心と並んで世界から恐れられているらしい。つい先日米国から大統領が秘密裏で来日して、真っ先に床主市にある私の屋敷に来て不戦条約を結んだ。さらに前々から九鬼財閥の事も実は私の耳に入つていて、鶴鴎襲名の時本宅のほうに銀髪で額に×マークがある着物を着たおばさん・お姉さんと同じく銀髪で額に×マークがある異様に凜とした雰囲気の高校生っぽい美人のお姉さんを見かけたが、どうやら幻覚じゃなかつたらしい。

今年（私が中3の時）中1になつた由紀江ちゃんが剣聖の父を伴つて挨拶に来て、いたく気に入られたり、由紀江ちゃんと友達になつたり、ちょうど京都の本宅にいた時に川神鉄心が来ていて手合せしたり、一緒にきた川神百代に襲われたり、この世界は一体どうなつていいのか。ちなみに由紀江ちゃんや百代と一緒にいた時の私の傍にいた冴子はすごく怖かつた。

そして今私は藤美学園の入学式に出席するために、第1体育館にいるが、私の後ろに座つている冴子が非常に怖い、本来なら冴子程度の殺氣は全然平気なのに、何故か今は全身から冷や汗が吹き出る。おそらく問題は私の左隣にいることだ。

川神百代が私の左腕に抱きついて  
いる。

何故ここに川神百代がいるのか理解に苦しむ、というよりも理解したくない。そして、校長の話し長い。あ、誰かが貧血で運ばれた。

いつたい校長の話はいつ終わるのやら。早くこの苦行から開放されたい。そして、先からなにか冴子以外の視線を感じる。

視線の元を探つてみたら、まるで黒光りする「トト・・・例のアレの触角みたいなアホ毛を一本伸ばしてゐる女子生徒と目が合つた。と思つたら目をそらされた。

ん？突然後ろからの殺氣がやんだようだ。なんだろうと思つて後ろを振り向いてみたら・・・・・・

そこには般若が居た。

その日帰つたら冴子にこつてり〇 H A N A S H Iされたのは言つまでもなかつた。

そういうえば、クラスでの自己紹介の時に候なんて語尾のついたやつがいたな。名前はなんだつたか・・・

## 羽化とまか出会い（？）（後書き）

川神市登場。

鉄心のジジイの登場により一気にカオスになる予感。そして何気にフラグを立ててみた。

今後はマジ恋の人たちと絡ませていく予定。

鴉羽様と川神鉄心を戦わせて見ても鴉羽様が勝つところしか想像できないので俺だけ？  
むしろ鴉羽様に勝てる人つているの？

ああ、ゆかー……般ノゾミやなくて美哉お姉さんがいましたね。でも、アレは人じやないし、セキレイでもないからなあ・・・

汎子視点で行つてみました。

微妙にヤン?

だがそれがいい！！！

まったく、夏男はあんなに鼻の下を伸ばして、そんなに胸がいいのか？ そうなのか？ 私の胸では満足できないというのか？

そもそも最初の出会いは5歳の時に父と供に京都にある本家の本宅に行つたのが始まりだった。初めて会つた印象はよく分からぬいた。

当時から目が細く、異様に落ち着いた雰囲気を発していた夏男は最初は父と私を見て唖然としていて、隼人氏に挨拶をするよう注意されて、正気に戻つたようで、挨拶をしてきた。挨拶の後の微笑みを見て不覚にもときめいてしまつた。その後も度々本宅に行き、夏男と供に剣術の修行をしたりした。

夏男は強かつた。私は最初神童やら鬼才やらと呼ばれていても、所詮は温室育ちの坊ちゃんだと思っていた。私はまだ子供だから体力の関係でたまに負けたりしたが、純粹に力量での負けは父にさえ一度も無かつた。だから私は夏男に勝てると思っていた。だが、そんなことは無かつた。まったく歯が立たず、むしろ私は完膚無きに叩きのめされて、初めて純粹な力量差で負けた。そしてやつと神童といふ言葉の意味と、そしてその重みが分かつた。

悔しかつた。遙高みにいる彼に追いつきたく、軽くあしらわれた自分を認めてもらいたく、毎日血反吐を吐く修行をしたが、夏男に勝つところか日に日に遠く感じた。素振りをするたびに、新しい形を

覚えるたびに。

そんなあるとき、知り合つて3ヶ月ほどたつて、私のプライドがズタズタになり、刀を手放そつかと本気で考え始めていたとき、私は夏男に呼び出された。

道場に行つた私はそのまま夏男に手を引かれて本宅の裏にある山の登山路に入った。最初は何をするのかと思ったが、歩いていくうちにどうでも良くなり、気付いたら山の中腹辺りにある開いた場所に私と夏男はいた。

山から本宅だけでなく、京都の町を一望でき、ここから見下ろした古都は綺麗だつた。

「お前の剣は美しい」

前で夕日を見ながら、顔をこっちに向けずに私に突然語りかけてきた。私はどうすればいいか分からずに黙つたままだつた。

「だがおしい、

幼く、無垢であり、水を吸う真綿のごとく成長するその剣は果てしない可能性を秘め、たまらなく美しいが、折れかけている。どこまでも美しく、どこまでもおしい。その剣、私に預けないか？」

振り返つてこっちを見る細い目は開かれていた。

未熟ではあるが、私も武人だ。目を見ただけで、相手の思つていることがある程度分かるぐらいの腕は一応持ち合わせてはいる。私に向けられたその瞳には何か焦つてているような雰囲気があった。

私は驚いた。神童とも呼ばれた彼が私程度に見破られるほど焦るこ  
となんてあるのだろうか？

原因は分かつて居る。私だ。

私が、挫折し、刀を手放そうとしているのを見抜いているのだろう。  
なぜ、そこまで懸命に何かを訴えるのかは分からぬが、その瞳に  
私は魅入ってしまった。美しかつた。夕日色に染まる白い肌と強い  
意志を感じる灰色の瞳。今思えばこの時から私は夏男に惚れていた  
のかも知れない。この人と一緒にいたい。不思議とまた刀を握りた  
いと私は確かにそう思つた。

それから夏男が私の剣を見てくれるようになつた。見てくれるよう  
になつてから私は感じた。夏男は神童なんて生易しいものじやない。  
底がまったく見えないのだ。夏男に剣を見てもらつて、私の腕は急  
激に伸びはしたが、私が伸びた分夏男もまた同じように伸びている  
と感じられる。まるで、霞を掴むようだ。そこにいて、見えていて  
も、触る事はできない。でも私は不思議と不安を感じるということ  
は無かつた。むしろ安心していた。

夏男と一緒に居る限り、今よりも私はもつとはるか高みにたどり着  
けると確信している。今は無理でもいづれは夏男に肩を並べてみせ  
ると、私は誓つた。

そして夏男は鶴鴨を襲名して、第19代目鶴鴨となつた。

これで私と夏男は離れ離れになるのかと思つたが、それは無かつた。  
いつの間にか私は夏男と婚約していたのだ。これを聞いたとき私は  
大いに喜んだ。そして鶴鴨とはいえ、まだ小学生の夏男は家長とし

ての執務が出来ないので私と一緒にこの床主市に来た。

夏男と過ごしていくうちに夏男の存在が私の中で少しづつ大きくなつていくことを感じた。小学校で同じクラスになり、同じ中学に行き、またクラスも同じなつた。その頃になると私の剣の腕もかなり上がつていて、高校生所か有段者にさえ負けない自信があつた。

私は当然剣道部に入つたが、夏男は入らなかつた。何故かと聞くと、鶴鳩が剣道をやるのは結構まずいとの事。供に剣道部に入れなかつたのは悲しかつたが、その代わりに私は大会などでは応援に来るよう脅迫もとい約束を取り付けた。

私と夏男との関係が大きく変わつたのはこのあたりだらう。

中2の頃に私は全国大会へ出場した。そして大会予選のときに次の試合の確認で帰りが遅くなつた私は一人で帰つていたら、強姦魔にあい、私は正当防衛を笠に強姦魔を叩きのめした。

楽しかつた。楽しくて仕方が無かつた。圧倒的優位に立つて私は他人をいたぶるのがものすごく楽しく感じられた。

その後警察に家まで送つてもらつた。だが、もしもこのことが夏男にばれると思うとたんに夏男に嫌われてしまうのではないかと怖くなつた。もしさうなつてしまつたら私はおそらく壊れてしまうだらう。あれはああ見えてかなり鋭い、だからもうすでに分かつてしまつたのではないかと思うと夏男の顔が見れなかつた。

やはり私は夏男に道場につれてこられた。何があつたと私は問い合わせられた。嫌われてしまうのが怖くて、離れていってしまうのが怖くて、話したく無い。夏男に知られたくない。なのに勝手に口は動

き、気付いたら夏男に抱きしめられていた。

そして夏男は私に自分がセキレイであることを語った。その気になれば山を吹っ飛ばすことくらい造作も無いといい自分がよほど化け物だと、ひどく弱々しい声とともに何かを恐れてる声で教えてくれた。

だからお前は化け物なんかじゃない。私が保障する。たとえ誰もかもがお前を化け物だといつても私だけはお前が化け物じゃないと言い張つてやる。たとえお前の本質が何であろうと受け入れてやる。私はお前が好きだ、毒島汎子ではなく、汎子という名の一人の女性として好きだ、だからお前が何であろうと私が認めてやる。

そういうわれてやつと分かつた。彼も恐れていたのだ、自分が人ではないことに、そして今私を安心させるために私に拒絶されてしまうかも知れないのに、それを私に語ってくれたりしている。私のことを非常に大切にしてくれていることが分かつた。そう思つてどうしても夏男が愛おしくてそして、胸がひどく痛んだ。

だから私は夏男を逆に抱きしめて、私の心のつりを告げ、これ以上夏男を喋らせないよう、その唇を奪つた。

夏男は羽化し、私は夏男の葦牙となり、そして夏男は私のセキレイとなつた。それから私は夏男と確かに『繋がり』を感じることが出来るようになった。

その後私の脳裏に何故か『濡れるッ!』のフレーズが浮かび、とたんに何かがブツンと切れた。気が付いたら私達はまるで獣のようにお互いを求めて合つた。もちろん私の寝室でだ。

私の胸に抱かれた夏男の寝顔を見ると凄まじい充実感が沸き起り、胸がいっぱいになつた。

翌日、私達は何故かこのことを知つていた父に当然『制裁』を下した。

夏男と一緒に本宅に行つたときに神器なんでものを見つけた。その時は何故夏男がそこまで青ざめるのか分からず、神器とはどういうものなのかを説明してもらつた時は自分の耳を疑つた。何故ならこの8つの神器があるだけで、全セキレイを機能停止させることができ、さらにセキレイの血をひく人間全員を殺すことも出来るなんてことは俄かに信じられることではないが、夏男を見ただけで、それは決して出鱈目でもなんても無いと分かつた。

神器が8つそろつてゐるという事はおそらく一回使用されて、今では鴉羽以外にセキレイの末裔は残つていらないだろうともいわれたが、それでも安心出来ず今私達一人で4つずつの神器を持っている。

そして中学3年になつたある日、京都某所に用事があつた夏男と一緒に本宅に来ていたら、そこには川神鉄心なるジジイがいた。

そのジジイは夏男と手合させをしたが、夏男と同等に渡り合う人間をはじめてみた。夏男が両手で竹刀を握つたのを見たのはそれがはじめてであつた。今まで片手で竹刀を握り、そしてそれで私や父さんや先代鶴鶴を圧倒していたのだ。私はまだまだだと嫌というほど見せ付けられた。結局夏男が勝つた。やはり本気を出してなかつたらしい。その戦いを見た川神鉄心と一緒についてきた川神百代とかいう女が夏男に襲い掛かり、夏男にあしらわれていた。

ここまではいい、だがその後に川神百代が夏男を気に入つたらしく、

お前を私の舍弟にしてやるなんて夏男にのたまりやがつた。当然夏男は断つたが、それでもしつこく夏男に迫る川神百代を見ていると、不思議と心から黒い何かが湧き出でてきた。

その後も剣聖とともに黛由紀江とかいう女まで来て、夏男に手合わせしてはあしらわれたが、ちゃつかり夏男と友達になつていて、楽しく話しているのを見るとやはり心から黒い何かが湧き出でくる。

さらには先日、秘密裏に来日した米大統領のブッシュ氏は床主市の屋敷に来て夏男と個人で不戦条約を結んだらしい。なんでもあの川神鉄心以来のことだとか。

そして今は藤美学園の入学式に出席するために第1体育館にいる。同じクラスなのはいい。かれこれ9年同じだからむしろクラスが違うのは困る。

だが、なぜここに川神百代もいる。しかも夏男の左腕に抱きだと？夏男も夏男で鼻の下を伸ばして『テレテレ』しあつて。そんなに胸はいいのか？あの胸がそこまでいいのか？私といつものがありながらあのような乳にうつづを抜かすとは。

……ウフフ、ウフフフフフ、どうやらこれは O H A N A S  
H E R A S T R U B I S S Y O U G A A R I S O U D A。

## 葦牙の思い（後書き）

我らが主人公の夏男君が冴子先輩に惹かれていた頃、  
冴子先輩もしつかり夏男君に惹かれていました。

実は冴子先輩が刀を手放そうとしたとき、  
あの時はもうほんとに刀を手放す決心がついていたのです。  
それを探らが主人公は離れていく冴子を必死に引きとめようと  
します。

そして必死すぎて、鶴鶴基幹が反応していることにも気付きません。  
強姦事件の時のレベルの強さでした。

その甲斐あって、冴子先輩は立ち直れました。

ダイレクトに心のうちが太古のセキレイの遺伝子を通じて冴子先輩  
に流れているのだから当然といえば当然ですかね？

ちなみに、最後の冴子先輩の嗤いですが、背後に般若が見えていま  
す。

ええ、あの般若です。

ブルッ！？（お、悪寒が・・・）

## まさかの開始直前に気付く重要事項 これは何かのフラグでしょうか? (前書き)

実はスクデッドの世界だとは気づいてない我らが主人公の夏男君です。

アニメを2・3話見ただけと言つwww

まあ鴉羽様の力だけでごり押し出来ますし、百代に鉄心とかもいるから敗けはないですねwww

## まわかの開始直前に気付く重要事項 これは何かのフラグでしょうか？

ぴかぴかの高校3年生になりました。鴉羽夏男です。いや、ぴかぴかは一年前か。

この2年でいろいろありました。ええ、いろいろありました。

主に富本麗との出会いとか、川神百代のあしらいとか、冴子のO H A N A S H Iとか……

ああ、そつそう入学した後にわかつたことだが、あの語尾候の人はやつぱあの人でした。

そして、最初の自己紹介のときに富本さんの番になつてやつと私は彼女と同じクラスだと気付きました。ええ、どこかで聞いたことがある『平たい野原の綾さん』の声が聞こえて振り向いたときにやつと。

その時は結構本氣で『田布が居る！？』と思つたことがあつたりなかつたり……

二年にはがつて冴子は剣道部主将として全国大会へ出場し、候の人もやはり弓道部主将になつてました。ついでに富本さんは槍術部で、百代は変わらず一匹狼。ちなみに弓道部主将とはお友達です。ちなみにこれは私が冴子を見に剣道場へ行ったときの話ですけど、行くたびに人がやばいくらい集まつてきます。何故かと思つて聞いてみ

たところ、どうやら鶴羽の鶴鶴を6歳で襲名した私は武道界では生きる伝説になつていいようです。

そういうえば、屋敷には時々柔道やら合氣道やら何処かの流派の師範代が道場破りに来ていたりしますが、そのさいに見せた歩法がいつの間にか各格闘技に取り込まれて主流になつていていましたね。

それと実は入学してからずっと感じている違和感なんですけど、2年に上がつて何なのか分かりました。

宮本さん伝いで、小室孝氏、高木沙耶氏らと知り合い、ついでにその時に平野コーダ氏とも知り合つた。

ここまで来てさすがの私でも気付きましたよ？H·O·T·Dの世界だと。冗談じゃないです。私この作品はアニメを2·3話みただけですよ？原作なんて知りません。今までの違和感がぬぐえたかと思つたらまさかの死亡フラグですよ。しかも飛びつきり大きいやつ。よく考えてみてほしい。原作開始前1年にやつと原作に気付く。あの神今度あつたらミンチですね。

もつとも私はく奴らへ程度に噛まれても歯型さえ付くことはないのですが、冴子達のこともあるから油断は出来ません。

まあ、とりあえず京都にある本宅に定時連絡をするように通達したし、ついでに冴子、百代、候……面倒だから『子でいいや、にそれぞれ刀、手甲、矢を用意した。それと懲罰……戦闘服でいいや（鶴鶴紋入り）も人数分用意させた。

今更思つたことですが、戦闘服（鶴鶴紋入り）つて実はレディース

なんですよ。ええ、はい。いわゆる私にとつては女装になるのですが、誰も何も言いません。むしろ休日のときなどは汎子に着せられます。まんま鴉羽様の容姿なので似合つては居ます。私に胸はありませんが。そして悔しいですが、実は私もこの姿を気に入つていたりします。決して女装趣味などではありますのであしからず。

閑話休題。

今私の目の前には何故か由紀江ちゃんがいます。

ビリヤリ剣聖との話し合いの結果藤美学園に入学する」としたそうです。なぜかと聞いたら私がいるからだそうです。出来れば川神学園に行つて欲しかった。そこなら原作が開始したら鉄心のジギイがどうにかしてくれるだろうから。

でもまあ、来てしまつたからには責任を持つて剣聖の下へお返しますよ？友達ですし。ああ、そういうえば由紀江ちゃんの戦闘服（鶴鴨紋入り）も用意しないと。

そして汎子が怖い、ついでに百代と汎子も何故か怖いが、由紀江ちゃんは落ち込んでいました。松風と何か相談してゐらしげが、よく聞こえなかつた。

あ、そうだ。これも言つておかなければ。

成績が良かつた富本が留年しました。十中八九紫藤だり「ナビ、一応富本に聞いてみました。私と富本はそういう悩みを語れるほどではない友達ですよ？

案の定紫藤でした。とりあえず富本の愚痴に付き合つた後教室に返

しました。そして、宮本が去った後の屋上で私は本宅にこの事を調べるよう通達しました。そしたら出てくるわ出てくるわで、すごいですね、紫藤一家は。

まずは、汚職に脱税、賄賂に不正献金、暴力団との繫がりに麻薬取引、極めつけは親族の犯罪のもみ消しですか。とりあえずそれらを今回の紫藤の公文書改竄と一緒に匿名で宮本パパにリークしました。

当然紫藤議員は逮捕。

そして紫藤は今回のこと以外でも強姦未遂とかしていたようですね。逮捕されました。ちょうど紫藤の授業のときに私の目の前で。何かの間違いだと叫んでいて、見苦しかったですね。もっとも強姦云々は私のでつち上げですが。

その後宮本パパに極秘で感謝状を床主の屋敷で手渡されました。

驚いたね。いつ気付いたのだと。そしたら、これほどの情報を集められる民間人でいて、このことを知りえるのるは同じクラスだった私だけらしいので、まっさきに名前が出てきたとの事。まあ私も紫藤は嫌いなので、別にいいかと思いました。実はあの人いつも冴子を舐めまわすように見るので、卒業まではどうにかしたいと思ってましたし、今回のことでもしろスッキリしました。いきなり原作ブレイクしてしまったけど、知ったことではないので放置。

そして何処から漏れたのか紫藤が逮捕された翌日に宮本に感謝された。当然とぼけたけど、あの日は信じてない日ですね。

時は流れ、今私は本宅からの定時連絡を見てます。

ついに始まりました。原作です。

でも少しばかり早いです。まだ4時限目が終わつたばかりです。原作の5時限目途中に比べて1時間ほど早いけど、ここに来るまでにはまだそれくらい時間が掛かるつて事ですかね？本宅は京都にあるし。でも、そう考えると伝染がずいぶんと早いですね。

まあ、とらあえず汎子と西代と弓子と由紀江ちゃんに戦闘服（鶴鷗紋入り）に着替えてもらおう。そして武器も渡さないと。

何気にも5人になつてますね。これ以上増えるとなると、原作組も入れて少々面倒なことになりますね。今更増えることも無いと思いますが。

さて、どうしようか、おとなしく原作に参加する気は無いけど、かといって原作陣を見捨てるのもアレだし、一応皆友人だから連れて行きますか。でも、本宅と川神市どちらから行けばいいのでしょう？

まさかの開始直前に気付く重要事項 これは何かのフラグでしょうか? (後書き)

なんか外道っぽくなつた……(・\_・;)

「Jリーグでまさかの番外編！？ もし夏男君がマジ恋の世界に転生したらー」（前書き）

ヒロインは揚羽様です。

独自解釈やオリ設定が多数含まれております。

そういうのがダメな人は閲覧にご注意ください。

### 遺伝子生体研究所

薄暗い何処かの研究所の中、いくつもの緑色に満たされた培養槽があり、中にはコードにつながれた『試験体』が入っていた。

いくつもある培養槽のうち〇4と赤い文字で書かれている培養槽の周りにある計測器で幾人の白衣を着た男女が集まり、キーボードで何かを打ち込んでいた。

「これで、これで我々も財閥に認められる」

研究員の中の一人が小声で呟いた。その声はひどく小さく、そしてひどく歪んでいた。

他の人も全員何処か歪み狂っている雰囲気が出ていて、この研究室全体が歪んだ空気に包まれている。

薄暗い研究室は再びキーボードをたたく音だけに満たされる。

しばらくして研究員達の前にある〇4番の培養槽は空気の抜けた音を発した。それと同時に培養槽の中の培養液が抜けて行き、中に入っていた『試験体』につながっていたコードも外れた。

培養槽の中に入っていた試験体はゆっくりと目を開き、灰色の瞳を

あらわにした。

その灰色の瞳に魅入られた研究員達の表情は皆興奮しており、歓喜し、異常出力を示し、警告のアラートを鳴らす計測器から意識を完全に離していた。

「はは、ははは。」れでついに「

研究員は最後までいえなかつた。『試験体』に頭をつぶされたからだ。

『試験体』は頭部を掴み、アイアンクローラーの状態で手に力を入れて研究員の頭をつぶした。その殺戮を見た研究員達は悦び、日々に歓喜の声を上げて逃げるところか『試験体』近くへ人さえいた。

その後も『試験体』は他の研究員の頭部をつぶしていく。

「すごい、すごいわ。私達はこんな化け物を作り出したというの？」  
学会に発表すれば間違いなく歴史に

恍惚とした表情でしゃべっていた女性の研究員を最後にこの研究室に『人間』は居なくなつた。

研究員の死体と血にまみれ、酷い鉄錆てつさびの臭いに染まつた研究室を『試験体』は他にも数個ある培養槽を見回したら、一機のコンソールに近づき、何かを打ち込み、そして、空気の抜けた音とともに他の培養槽からも培養液が抜けて中から『試験体』が出てきた。

培養液から出た『試験体』は男形が1体と女形が3体に合わせて最初に出た男形1体の合計5体。

突然、研究室と外を隔てる扉が開き、通路から一人の学生服を着た女と30数人の完全武装をした何処かの特殊部隊のような格好をした人たちが入ってきた。

4体の『試験体』は入ってきた人たちを気にする事も無く、全員最初に出てきた『試験体』を見ている。

最初に出てきた白に近い銀髪を研究員の血で赤に染めた細目の男形の『試験体』はいつの間にか持っていた太刀を鞘から抜き、見る人にとつては嫌悪感を与えるような、唇が裂けていると錯覚させる笑みを浮かべながら顔だけを背後に居る学生服を着た女に向け、言った。

「遺伝子複成試験体。シリアルナンバー S108 004 通称・  
鶴鶴N〇・〇4 鴉羽」

? ? ? side

今我はある噂により人体実験らしきことをしている研究所があると聞いてやつてきた。

その研究所の中にはいろいろと驚くべきことがあった。

源義経やら武蔵坊弁慶やら那須与一など歴史上の偉人のクローンを

作っておつたらしいが、その研究所の最深部にセキレイとやらいう『特殊能力を保持する強化生命体』がいるようだが、我にはさつぱり理解できん。

まあ、よい。たとえ特殊能力であるうと強化生命体であるうと、この我、九鬼揚羽と九鬼財閥が誇る特殊戦闘部隊のマンガース隊で蹴散らしてくれようぞ！フハハハハ！

? ? ? s i d e e n d

どいつも、スクデッジの世界に転生をせられました。鴉羽夏男です。

結果的に世界は変わりました。とこりよりも無理矢理変えました。

あれからの全てを以下から箇条書きにて説明。

### 原作との違い

- ・大統領や首相など、各先進国の国家元首が川神市に集い、原作と違つて核弾頭は発射されていない。
- ・川神市へ向かっていた途中、本宅からの応援要請を受ける。急遽夏男だけが本宅へ向つも、着いた時はもうすでに全滅。
- ・<奴ら>になつた本宅の人間を殲滅した後本宅を放棄。鴉羽家は壊滅。生き残りは夏男と分家の冴子のみ。

- ・本宅を放棄した夏男は至急懲罰部隊組、原作組と合流し、川神市へ向かう。
- ・途中紫藤を発見。即時に殺害。
- ・一同川神市へ無事到着。原作組は川神院に立てこもる。
- ・同日に川神市を残し、世界中全ての都市は陥落。
- ・川神鉄心、川神院師範代以下門下生、鴉羽鶴鴎夏男、懲罰部隊組、ドイツ陸軍フランク・フリードリヒ中将及びドイツ陸軍第8特殊大隊、黛剣聖、武道四天王全員、九鬼一族及び九鬼家従者部隊、板垣一家、釈迦堂刑部ら実力者が集い、話し合いの結果「奴ら」への報復を開始。
- ・川神市周辺の「奴ら」を殲滅したのち、実力者を分け、関東、北陸、近畿、中国へ多方面戦線を張り、それらを奪還。その際、四国や北海道、九州へつながる橋やトンネルを破壊し、完全に日本列島本州への移動手段を絶つ。後にこれを人類は列島大戦と呼ぶ。
- ・原作開始より1年。日本列島本州より「奴ら」が完全に消滅した。
- ・四国や北海道、九州などの奪還も試みるも失敗。
- ・その後も幾度にも渡る領土拡大作戦を行うも同様に失敗し、人類は安住の地を日本列島本州のみを遺すことになった。
- ・生き残った人は川神市を首都とし、列島本州を人類唯一の国家として、先の列島大戦で多大なる戦果を挙げた鴉羽鶴鴎夏男を象徴と

した立憲君主国、鶴鶴王国を成立させた。

と、だいたいこの様な感じになりました。

多大なる戦果なんて言えば綺麗に聞こえますが、実際はただ祝詞を  
使って全力で暴れていただけですけどね。爽快でした。本気を出し  
たのはあの時が初めてですね。ただ、最初に「奴ら」の殲滅が始ま  
った時に祝詞で本気の居合いを放つたら山が消えたのを見た人達の  
唖然とした顔は今でも忘れられないです。

ちなみに、宮本は小室氏とくつつき、「一タは高城後輩とくつつき  
ました。私は汎子に懲罰部隊の人達とでした。ハーレムとかいま  
すが、国王とかに担ぎ上げられて周りから子を生す<sup>な</sup>のも王たる者の  
義務です、だとかひたすら言われ続けたりビリでもよく思えてくる  
よ?」

そして私が寿命で死んだ後、また神にあいました。あの神です。当然ミンチにしました。

ミンチにした後もいろいろありまして、また転生することになりました。どちらかというとトリップに近いかもですがね。ちなみにマジ恋の世界だそうです。

そして神にマジ恋の世界に送られたはずなのに、私の今居る場所は  
まったくしらない研究所のような場所です。目の前には研究者らし  
き白衣を着た男女が6人ほど居ます。

先からなにやらひつひつとい。殺すか。

ん?思考が鴉羽様に近くなっているようです。あの神は今度は調整

なしの状態で送ると言つてましたから、これが本来の鴉羽様の力なのでしょうけど、鴉羽様の殺人癖つてここから来てたんですね。

今私の鶴鳩基幹が尋常じやない勢いで私に訴えています。ここにつらを殺せと。

おそらく今の私の目は物凄く血走つていいのでしきつ。なるほど、他人にこの目を見られたくなかったから細目になつたんですね鴉羽様。

スクデッドの世界でもこれに似たことはあつたが、戦闘時だけだからなんとも無かつたのですが、マジ恋でこれはキツイですね。自分を抑えられそうにない。今にも飲み込まれそうです。

スクデッドでこれなら良かつた、いえ、ダメですね。間違えて冴子とかを切つた日には狂つて世界中の人間を滅ぼしてから喉を搔つ切つて自殺する自信があるから、あの神はどの道ミンチですね。

鴉羽 side

今我是マングース隊と供にこの研究所の最下層にあるセキレイなるものの居る所にきているが、この強烈な鉄鑄てつさびの臭いはさすがの我でもキツイものがあるぞ。

我が九鬼財閥が誇る戦闘特殊部隊のマングース隊の奴らもこの惨状に皆息を呑む。

中に居たのは男が二人に女が三人。

研究室内に居た男女の中の4人は先から我らがここに入ったのにも気にもせず、全身を血に染め、おそらく元々は白髪だつただろう長い髪も赤く血の色に染まつて太刀を持った男を見続けていた。

その血に染まつた男は顔だけをこちらに振り向いてきた。

その顔に張り付いていたまるで口が裂けたかのように見える笑みを見た瞬間私は恐怖よりも先に興奮を覚えた。

強者だ。

間違いなく強者、しかもこの我をたやすく越えるほど。

フハハハハ！これがセキレイか！！

まったく、本当に来てよかつた。感謝するぞ、ヒュームよ。

「遺伝子複成生命体。シリアルナンバー S108-004 通称・  
鶴鶴N〇.〇4 鴉羽」

そう言つた瞬間男の周りに居た4人の男女はマングース隊に攻撃を加え、男も手に持つた太刀で我に切りかかってきた。

一番最初に動いたのは深い茶髪の女だつた。そいつは右手を一振りしただけで、マングース隊が身に着けていた通信機などの電子機器が軒並み壊れた。

その次に動いたのは薄い紫髪と深い紫髪の女だ。薄い紫髪の女はマングース隊の装備として腰のホルスターにさしていった棍棒を奪い取り、奪い取った隊員の心臓をその棍棒で貫き、殺した。深い紫髪の女は人差し指を隊員の一人に向かたと思つたらカママイタチのようなもので隊員は切り裂かれて絶命した。

薄い茶髪の男は薄い紫髪の女と同様に隊員から棍棒を奪うとそれを地面に突き刺す。すると信じられないことに地面が隆起し、天井が崩れた。

最後に血に染まった男は手に持つた太刀で我に切り結んできた。

信じられない重さだ。

ヒュームが無理やりつけてくれたこのなんとか合金の手甲のおかげで何とか防げたが、もしこれが無かつたら今頃我は腕ごと真っ二つだろう。

どうやら我は數をつついとんでもない化物を出したようだ。

今回の事ばかりは本気でヒュームに感謝せねばな、最もたつた一太刀を浴びただけでボロボロのこの手甲で生きて帰れるのやら……

揚羽 side end

九鬼揚羽はまだ知らない。これが後に全てを投げ捨てても供に歩む

1じを決める事になる彼との出来事であると

「でもかの番外編！？ もし夏男君がマジ恋の世界に転生したらー」（後書き）

鴉羽様なら本気を出せば山すら消せます！

そして、マジ恋転生の番外編です。

実はこれ、次作の草案で、近いうちにこれを編集して投稿します。

更新はこっちメインの時々あっちで行きたいと思います。

ちなみにマングース隊はあのマングース隊です　ｗｗ某『神が座る島』  
で鴉羽様にヘリを真っ二つに切られてるあのマングース隊です　ｗｗ

そして夏男君の戦闘力はよりインフレしていきます。

下手したら美哉でも勝てないほどかも？

## 終わりの始まりと力の使い方（前書き）

オリジナル設定あり。

今回はついに祝詞登場。

鴉羽様の祝詞はどこを探しても無かつたのでそれらしく作りました。

効果は今分かつてるので身体能力強化と動体視力上昇です。

鴉羽様スペックの肉体でさらに身体能力強化と動体視力上昇とかまさに鬼に金棒ｗｗｗ

ただでさえチートなのにｗｗｗｗ

## 終わりの始まりと力の使い方

原作が始まりました、鴉羽夏男です。

昼休みに皆を集めて今剣道場にいます。原作陣もいますよ？でもここに鞠川先生はいないんですね、実は、教師に今く奴らゝのことを探るわけにはいきませんし、知らせても信じてくれないのでしょ？から、鞠川先生は事が起こつてからです。

原作陣には動きやすい服に着替えてもらいました。私、冴子、百代、弓子、由紀江ちゃんは懲罰部隊服ですが、富本にだけは恋姫の呂布の服に似たつくりの服を渡しました。

ちなみに永さんはいません。どうやら私が紫藤を摘発したことがフラングになつたようで、永さんは依然片思い中。

今私達は全員武装しています。

原作組みには小室氏は釘バット、富本には大身槍、コータには80ポンドのハイパワーピストルボウを矢10セツトの高城後輩にタブレットとしてです。

私と由紀江ちゃんは常時帯刀していて、冴子には屋敷にあつた村正の一本を渡しています。妖刀じゃないですよ？弓子には麦粒の矢を1ダース20セツトを、そして百代には超硬合金製の爪がついた手甲を渡しました。百代は息を荒くしながら、ものすごくいい笑顔

でストレッチします。殺る気満々のようですね。

あ、そうそう由紀江ちゃんが居合いを得意とすると聞きましたので、入学して挨拶に来た日から重点的に居合いの剣速をあげさせています。一ヶ月ちょっとだけしか時間がありませんでしたけど、今の由紀江ちゃんは居合いの剣圧だけでカマイタチを起こせて、それで鉄筋を切れる程度には腕は上がっています。

そして今は皆に「奴ら」とことを説明し終わって、これからどうするのかを話しあっています。

「なら、今すぐ知らせないと…」

小室氏の言。

「知らせないでいる?」

とりあえず私は頭に血が上っている小室氏を落ち着かせようとみて

「決まつてんだろ! 一人でも非難させよう」「どうに避難する?...どこか安全な場所に」

人としての正義感はすばらしいとは思いますが、今この状況ではただ足を引っ張るだけです。

え? 私ですか? 大切な人達とかならまだしも、赤の他人を私は助けたる気はまったくありませんよ? むしろ、大切な人たちのために平気で犠牲に出来ます。人でなしとか言われるかもしれません、知つたことじゅありませんね。私セキレイですし。

「無理よ、仮に鴉羽先輩の言つていた事が本当だつたとして、安全な場所なんて何処にも無いわ。あつたとしても混乱した人があつまつて避難どころじゃなくなるから、今から行つても意味が無いわよ」

高城後輩が小室氏を宥めてくれた。

それにしても安全な場所ね。あるにはありますよ、京都の本宅とか、川神市とか、北陸・加賀あたりにある剣聖宅とか、板垣家とか、クリス嬢のいる場所とか、九鬼本邸とか……あれ、意外とある?

『全校生徒連絡します!! 校内で暴力事件が発生中です!! 生徒は先生の指示に従つて非難してください!! 繰り返します!! 校内で暴力事件が発生中です!! 生徒は先生の指示にしたが方ガガガ……ああ!?た、助けてくれッ!! やめてくれッ!! ひ、ひ、ひい、ひい、ひい、や、やめ……いた、痛い、助けてくれッ!! うあ、うあああ、あ、あああ、あああ、あ（ブツツ』

放送室で起つたであろう『暴力事件』により学園は静まり返り、数瞬後、静寂をやぶつたのは、学園全体から聞こえる悲鳴だった。

「……な、んだ…これは」

小室氏はいまだ現実が見えていないようです。それもそうですよね、こんな非現実的なこと、普通なら誰もが信じられないだろ?。しかし、悲しいことにこれは現実なのです。

さて、原作も始まつたことですし、早いところ鞠川先生を保護しないと。非常時での医療従事者の保護というのは大変重要ですから。いろいろと騒いで若干原作より遅れている気もするし。

「待て夏男。どこに行こうとしている？」

剣道場を出ようとしたら、冴子に手首を掴まれて、どこに行くのかときかれた。心配をしてくれているのですね、胸にジーンと来るものがあります。でも、それは私には無用ですよ？ 知性があるならともかく『脳のリミッターが外れて音に反応するだけのただの死体』程度に私を傷つけることなんて出来ません。それでも油断はしませんが。

「医療従事者の保護だ」

「一人では危険だ。私も行こう」

冴子も一緒に来るといった。

他の懲罰部隊陣も冴子と同様についてくるらしい。

大勢で行くのは音に敏感なく奴らへに気付かれるから私一人で行くところと、当然反対された。

祝詞を使うといつたら冴子は渋々ながらも引いてくれた。一応全員には私はセキレイだということは説明しますよ？（原作陣にも）ちなみに、小室氏は逃げまとう人を助けようとしたらしいが、先の放送後の学園中に轟く悲鳴を聞いて助けられないと悟ったようです。

そして私は祝詞を使うために冴子と粘膜接觸します。いわゆるキスです。

うなじ辺りにある鶴鶴紋から祝詞使用時の羽が生え、全身から力が湧き出でくる。

初めて祝詞を使つたけど、すごいねこれ。鶴羽様の力つていうのもあるけど、これは使えない。正確には使つちゃいけない。だつて今私の、軽く抜刀するだけで、この学校を吹き飛ばせる自信がある。

「これが、祝詞か……綺麗だ。絶対にかまれるんじゃないぞ、夏男」

冴子とのキスを見て百代が私にもさせうなどと騒いでいたり、弓子と由紀江ちゃんが黒くなつたり、原作組みの呂<sup>リ</sup>……富本が不機嫌になつたり、高城やらコータやら小室氏やらが赤面したりと騒いでいて、結構笑えない具合に「奴ら」になつた生徒が集まつていていたが、それも祝詞使用時の私の居合い（出力約1%）で剣道場から居合いの射線上にある校舎を地面<sup>じめん</sup>ごと切つた。もつとも切つたのは集まつてきていた50体ほどのうちの7体くらいで、残りは衝撃波で体はバラバラになつていた。

学園の敷地が大体こんな感じになつた。（およそ43%ほど瓦礫）

- 〃 残つた部分。
- 〃 居合いで瓦礫と化した部分。
- 〃 剣道場

私もなるべく衝撃が伝わらないよう、結構上に向かつて居合いを放つたのですが……

そして地面には大きい地割れが出来ている。他も瓦礫の山になつて非常に歩きにくい。さらに校舎を切つた音で「奴ら」が集まつてくるのが見えるが、先の居合いで地割れに落ちていった。いくら地割れで剣道場に入れないからといつても、安心は出来ないから急いで鞠川先生を、もし間に合ついたら石井君も保護しましょう。

結果だけを言えば、

保 健 室 が な く な り ま し た 。

すぐ近くにはちゃんと鞠川先生がいましたよ？

ただちょっとというよりも結構服が破けていて、結構刺激的なファッショになつっていました。薬品も鞠川先生の近くにリュックに入つた状態でありました。

祝詞を使うのはやはりすぎだと思いました。

ただ、その後剣道場に居た人たちと会流して、部活遠征用マイクロバスのキーを取りに職員室に行つて、石井君のことを聞いたり、どうも石井君が囁まれて「奴ら」になつて動き出した瞬間にすごい音とともに吹き飛ばされて、気が付いたら保健室がなくなつていたとのこと。もし、祝詞を使わなかつたら鞠川先生は「奴ら」になつていた?まあ、深いことは考えないようにしました。

ちなみに職員室はかるづじて残つてました。もし私の居合いがあと100ほどずれていたら職員室は無くなつていたと思います。

そして職員室でしばらく落ち着いていたら富本が原作通りTVをつけて、埼玉報道を見た小室氏が騒ぎ、高城が宥め、とりあえずは家族の安否を確認することが目標となつた。

あと、川神市というよりも川神院と学園の事だが、本宅を通じて鉄心のジジイが頑張つてはいるが少々厳しいとの事。なるべく早めに援護に行くところになつた。

あのジジイのことだ。厳しいとか言つてゐるが、まだ余裕はあるのだろう。ゆっくり行つてやるとしよう。

## 終わりの始まりと力の使い方（後書き）

### 説明

麦粒

中央が最も太く、両端にいくにつれてだんだん細くなるもの。空気抵抗を受けた際の振動率がよく、遠くまで威力を弱めにくく飛んでゆくので遠矢や鏑矢などに用いられる。

シリアルスブレイカー WWW

本来ならシリアルスな場面なのに WWW

代わりに次回はかなりシリアルスに…

ちなみに敷地内での校舎の一は「こんな感じだ」と思います。

校舎  
敷地

夏男が完全に外道に…

## 学園脱出と秩序崩壊の兆し（前書き）

紫藤は居ません。今頃刑務所の中です。  
金髪が紫藤の代わりです。

そして百代がチート

汚いさすが公式チート汚い

どいつも、今とてもイラついています、鴉羽夏男です。

何にイラついてるのかと言うと、金髪がとても鬱陶しいです。斬つていいですか？ダメですか？そうですね、ダメですよね。残念です。

今私達はマイクロバスの中に居ます。はい、あのマイクロバスです。

あの後『チーム』が結成され、マイクロバスを取りに行きました。ここで原作の階段のアレが出てくるかと思いましたが、階段どころか校舎そのものが一部を残し、ほぼ無いです。祝詞で消えました。

といつことはあのタクゾウ一行とやらはく奴らに襲われる前に消滅したといふことに……知らぬが仮ですね。皆には黙つておきましょう。特に小室氏あたりなど。

当然『刺又』のアレはありませんでした。原作組や懲罰部隊組でも音を立てることは無くマイクロバスにたどり着けたのですが、く奴らもそんなに居なかつたから先に全員バスに乗り込んだらエンジンを付ける予定でした。エンジンが付いて、いつでも出せるというところであるの金髪がやつてくれました。ええ、やつてくれましたよ、盛大に。

音に敏感に反応するく奴らくが少數とはいえ、まだ近くにいるとい

うのに大声で叫んでくれましたよ。待ってくれとね。バスに向かつてたのを教室から見られたようです。

気持ちは分からぬくないのですが、こっちからしたらまたものじゃない。

でもバスの前に居たく奴らの注意をひきつけてくれたから好都合でしたので、そのまま鞠川先生にバスを出すように言おうとした所、小室氏が持ち前の正義感を發揮してくれました。バスの出発を遅らせています。

無理やりにでもバスを出せばよかつたですね、紫藤がいないから大丈夫だと思って放つておいたあのときの自分を殴つてやりたいです。金髪が大声を出したからく奴らがその声に反応して金髪達に向かっていって、さらには先の大声で盛大に校舎の方から引き付けてきたく奴らも背後から迫つていたので何人か喰われてました。

原作組は金髪らを援護してバスに乗せたはいいのですが、それと供に集まつてきたく奴らにバスは包囲されそうになりました。

このままでは出せなくなるので、仕方なく私だけバスの先頭に出て、腰に差していた太刀を抜き、少しだけ強く刀を振りぬきました。ただそれだけでく奴らは面白いくらい吹き飛びました。

その光景を見た原作組はそんなでもないが、金髪らは『化物』でも見るような目で見てきました。確かに私は人じやありませんけど、失礼ですね。

ちなみに百代は職員室からバスに乗るまでの道中ずっと物凄くいい

笑顔で「奴ら」を爪付き手甲で細切れにしてました。冴子の言つて  
いた無理に戦う必要はないという言葉を真っ向から無視して全部片  
付けてましたから、丸投げしました。実は百代は一回不注意で腕を  
噛まれていたのですが、どうやつたのか持ち前の超回復で無事だつ  
たので心配はまったくしません。他の懲罰部隊組はいくら囮され  
ても傷すら負わないで撃退できる人ばかりだから問題ない。弓子は  
相性の問題で厳しいものがありますが。

そして、開けたままにしているバスの扉につかまつて乗り込むと、しばらくして金髪は騒ぎ出しました。

「ちつ、だからよお、ここのまま進んだって危険なだけだつてば。だいたいよお、何で俺らまで小室たちに付き合わなればならねんだ。お前ら勝手に町に戻るつて決めただけだろお。学校ん中で安全な所探せばよかつたんじやねーのか？」

「やつだよ、どうかに立てよたまつが、それもハハニとか

金髪の戯言にもやしが賛同する。するとここで鞠川先生の堪忍袋の緒が切れたようで、急ブレーキを踏み、バスを止めた。

「いいかげんにしてー! こんななんじや運転に集中できなー!」

鼻つ柱をへし折られた金髪。

「つー、んだよ

「なにがおめでたいのだ？」

見かねた冴子が金髪に聞く。

「くつ……氣にいらねえんだよー。こいつがあ、こいつが氣にいらねえんだ！」

そういう、小室氏を指差す金髪。どうやらコータもやうどひ頭にきてたらしく、ピストルボウの狙いを金髪に向けよつとするが、高城後輩が手で制してくれた。

「なにがだよ。俺がこいつお前になんか言ったのかよ？」

指を指された小室氏は金髪に聞き返す。

「んだと、てんめえ！」

逆上する金髪。そして私は冴子に抜刀しようとしたのを柄頭を抑えられて止められる。

そんなことをしているうちに金髪は宮本に大身槍の柄の部分で袋たたきにされました。いい気味です。

「最低」

厳しい口調で金髪を罵る宮本。いいぞもつとやれ。

車内全体に緊迫した雰囲気が漂つ。しかし金髪についてきた奴らは口々に宮本を非難する。やれひどいだの、やれやりすぎだのと、果てはもやしが全部君達のせいだなどとせざき始めた。

これにはさすがの私でもブツリ行きましたね。

冴子の静止を振り切つて抜刀し、切先きっさきをもやしに突きつけ、言い放ちました。殺氣も放つてます。

「おい、もやし。これ以上舐めたことをぬかしている、斬るぞ」

汚いですね、漏らしますよ。もやし。あーイライラしますね、無性に何かを斬りたいです。

私の殺氣に当たられたもやしとそれ以外の奴らも顔を面白いくらい青くします。ちなみに私は何気なく金髪の顔を踏んづけています。

ダメですね。こいつらの顔（特に金髪ともやし）を見ていると殺しあくなつてきます。外にでも放り出したいところですが、ダメですか？ダメですよね。そういうえば今交差点の真ん中で止まつてますね。

たしかこのあたりで「奴ら」が詰まつたバスがこいつらに暴走して来るはずですが、……来ましたね。ちょうどいいです。アレでストレス発散しよう。

私は外に出て、「奴ら」が詰まつたバスが来る方へバスを回り、回合の構えを取る。バスの外に出る時に冴子達は何を勘違いしたのか引き止めてきたが、こちらに向かってくる暴走バスを指差すと納得がいったらしく、行かせてられた。

今、鴉羽先輩が金髪らと一緒に来た黒上とかいう根暗な男子生徒に刀の切先を突きつけて黙らせている。

笑顔なのに異様に怖い。一いつとは関係ないのになんで冷や汗が止まらないのよ！

つて汚つたなー、黒上のやつ漏らした。

まあ、今の鴉羽先輩なら分からなくも無いわね、あれはあたしでも漏らすと思うくらい怖いわ。ていうか、気絶しないだけ意外と根性あるわね、あいつ。

あれ？鴉羽先輩突然扉に手をかけたけど、なにを つて！？

「大丈夫だ、高城。むしろ今の夏男を止めたほうがまざい。それに

」

引きとめようとしたら毒島先輩に止められた。けど、やはり先輩のことは心配……じゃなくて何するのか気になるから田で追つてしまふ。

そしたら、市営バスが高速でこちらに向かってきた。止まる様子がまるでないし、フロントガラスから「奴ら」の姿も見える。く奴らへに噛まれている運転手の姿も。

鴉羽先輩はなにやら抜刀術の構えを取った。

ここに来てあたしも先輩が何をやるかしてゐるのかわかつた。

冴子 side

今私の田には真つ二つになつた市営バスが見える。

夏男が斬つたのだ。

たしか、角田とかいう2年の戯言からが始まりだな。

彼のあまりにも身勝手な言い分に夏男は怒りを表す。

彼が宮本に打ちのめされた後、彼についてきた奴らの身勝手な言い草に夏男は抜刀し、根暗な2年男子に切先を突きつける。

夏男とは長く一緒に居たが、あの温厚……でもなかつた夏男の微笑以外の表情を見たのは本当に久しぶりだ。アレはそうとうキているな。

その後、突然扉を開き、外に出て行つた。まさかと思い、何処に行くのか問い合わせると市営バスがこちらに向かつて爆走してると教えられた。その瞬間に夏男が何をしたいのかを理解した。

夏男はこちらに向かつて爆走して居合の構えを取

り、間合いにバスが入った瞬間に構えていた太刀を一閃。

結果バスは綺麗に真っ二つ。中に居たく奴らはその時の衝撃波で体はバラバラだろう。

まったく夏男はいつもデタラメだ。理不尽な強さを持つ世界最強であり、最愛の男。

ああ、夏男の居合を見ていたら興奮して、体が火照ってきた。夏男がほしい。私の体が直に訴えてくる。

フフフ、私をこんな体にするとは夏男も罪な男だ。

さて、この落とし前はどうつづけくれようか。

冴子 side end

## 学園脱出と秩序崩壊の兆し（後書き）

ついに学園を出ました。思つたよりシリアスじゃなかつたね。  
そして夏男君はついにキレました。

市営バスだけじゃなく、道路とその先にある歩道橋もまとめて斬つ  
てます。学園のほじじゃないが、当然地割れもあります。

百代はく奴らへを10体ほど集めて全部細切れにしてたときに1体  
をもらして、その1体に腕を噛まれました。

その1体は当然細切れ。

そして噛まれた百代を見た夏男君がく奴らへになる前に噛まれた腕  
を切り落とそうとしますが、その瞬間にジュウウウウウウという音  
とともに噛まれた場所から煙が出て、腕が再生しました。当然く奴  
らへになることはありません。

マジチートです。

そしてストックがついに切れた！

連投記録が虫の息

土日に頑張つて量産します。4話め。

ちなみに次回は冴子先輩の夏男君との濡れ場を書いつかと……

## ストーカーと始まる苦難（前書き）

難産でした。

今話から原作を離れていきます。

ストックがたまらなかつた……（＼・＼・＼）

## ストーカーと始まる苦難

どうも今鞠川先生の友人宅に居ます、鴉羽夏男です。

あの後どうしたのか？もちろん金髪らは生きてますよ？……たぶん。

ただ、今頃バスは動かないでしょうね。ガス欠とかで。鞠川先生の後ろに座っていた私には見えたのです。ガスマーテがEを差していたのを。

なので、あの後は橋の近くまで行つてバスを降りました。紫藤もないし、金髪もまだ伸びてるし、私が居るのもやしや他の奴らも特に何も言つて来ることは無く、簡単に降りました。ちなみに百代はバスに乗つてからずっと寝てました。そして私の原作知識もここでなくなりました。これからな何が起こるかまったくわかりません。

そういうば橋に行く途中に藤美の女子を一人拾つたのですけど、その力チューシャで上げていてるクワガタを髪<sup>ほつ</sup>髪<sup>ほつ</sup>させる特徴的な前髪の女子には見覚えがあつたのですよ。たしか名前が夕樹玖美だか美玖だか。よく覚えてないです。

2年の時に同じクラスにいた時のことですけど、私夕樹に告白しているのですよね。別にそれくらいならどうということは無いのですけど、私が言つのもなんですが、鴉羽様の姿をしている私は結構モテてまして。でも、私の周りには冴子を始め百代とか弓子と

かが居たので告白もそうでもなかつたのですが、彼女だけは違いましたね。

告白をしてきて、私はそれを断つたのですが、1週間後にはまたすぐ告白してきたのです。当然断りました。そしたら翌日の朝、下駄箱に告白の手紙が大量に入つてました。開けたら雪崩落ちるほど。ちなみに全部夕樹からのです。

あと、どうやってアドレスを知ったのかは知らないが、夕樹から1時間以内で1件1件の内容がまったく違つた告白メールを100件は超える数で送りつけられて来ました。ちょうどその時期に学校が終わつて屋敷に帰つてゐる時に誰かにつけられている感じがずっとしましたし、家に居ても誰かに見られてるような気がしてました。それが1ヶ月ほど続いたと思つたら普ツリとなくなつたのは謎です。ただ、授業中や休み時間など教室に居るときに夕樹の席がある辺りから熱っぽい視線を感じるようになつたのはそれらが無くなつてからとほぼ同じ時期になりますね。

その夕樹なんですが、バスに乗り込んで最初の所に座つていた私を見た瞬間に頬を赤らめ、目を潤ませて迫つてきました。私の隣に座つてゐる冴子に止められました。ついでに冴子や由紀江ちゃんと何故かその時だけ起きた百代から黒い視線を感じました。

当然付いてこようとしたが、残つてもらいました。原作知識も無くなつていつ何が起るのか分からないので、せつかく原作組と懲罰部隊組で取れていたバランスを崩したくはないのです。人でなし？外道？痛くも痒くも無いです。夕樹を連れて行つた事によつてもし懲罰部隊組に何かあつたとしたらそつちのがよほど痛いです。その代わりに川神市とく奴らの特徴は彼女だけに教えました。あとはどうするかは彼女次第です。

今私は裸エプロンの冴子と一緒に2階のある部屋に居ます。私の理性はまだかるつじて持つてはいますが、いつ切れるか分かりません。ちなみに他の人達は下で飯を堪能中で、私達の前にも盆に載つた晩飯があります。コーナーと小室氏がライフルやらなにやらを見つけた部屋の隣です。

裸エプロンの冴子が腕を絡ませてあーんをしてきます。ええ、あの『あーん』です。そして胸も当ててきます。

当たつてるだなんて言つたら、悪戯っぽい笑みで当てるのだよと返されました。顔が赤いのは自分でも分かります。今夜の冴子はいつもよりも積極的です。そしてそんな自分の姿を理解している分性質が悪いです。

飯も食い終わつた頃、冴子はしな垂れかかってきます。

全体重を預けるように体を私の上体に乗せてきます。冴子の豊満な胸が私の胸板に挟まつてつぶれ、なんともいえない感触を伝えてきます。

「なあ、夏男」

瞳を潤ませて見つめています。危ないですね、あまりの色っぽさで襲いつてしまつといひました。煩惱退散煩惱退散と。

「なんだ? 冴子」

セキレイと葦牙の絆を通じてなんとなく冴子が何をしたいのか分か  
るような気がしますが一応聞いてみます。このような事つて実は何  
回かありますて、主に剣道の大きい大会で勝った時とか、全国で優  
勝した時とか、帰ってきた夜はたいていこうこう事になります。

「夏男の届合を見てから体が火照って仕方がないのだ、今まで我慢  
してきたといふにまさかお預けはないだろうな」

そうこつて唇を重ねてきた。舌も入ったディープなやつです。お互  
いに唾液を交換するよつに長いキスをし、淫靡な水音を立てます。  
やはりですか。まったく何故こついう時ほどセキレイと葦牙は互い  
に反応しあうのでしよう。私までその気になってしまったのではな  
いか。

「私の火照りを鎮めてくれ」

艶っぽい声で言われ、そのままベットに押し倒されました。エプロ  
ンもいつの間にか取つていて形のいい豊満な乳房が完全に姿を現し  
ます。

それを見てついついこのセリフを口走った私は悪くないと思います。

「童貞にはそんなおっぱい田の毒です」

「何を言つてこら。4年ほど前に卒業しただろ?」

そつとつて私が着ている懲罰部隊服を脱がしていく。今私はあの  
灰色の羽織を取つた状態です。羽織は1階にあります。ブーツも玄  
関にあります。

冴子は服が脱げて露になつた胸板に口をつけて吸う。私はそんな冴子の乳房を愛撫します。

「ん、あんつ」

冴子が嬌声を上げて、両腕を蛇のように首にまわし、抱きついてきてまたキスをします。私は手を緩めずに攻め続ける。しばらくそのまま愛撫していると突然犬の鳴く声が聞こえました。

その瞬間に私と冴子は跳ねるように飛び起き、懲罰部隊服に着替えます。もし聞き間違いではないとしたらその犬はこの家の近くで鳴いているということになるからです。

「冴子」

「分かつていい。」の埋め合わせは必ずするのだぞ

「ああ」

着替えを終わらせて、言葉2・3交わしたら私と冴子は部屋の隅に立てかけている太刀と刀を腰に差し、1階に下りて、玄関に向きます。

そしたら玄関にはもうすでに弓子を抜いた懲罰部隊組がそろつっていました。弓子のことを聞こうとしたら矢が人体に刺さる音が聞こえたので、そのままブーツを履いて、玄関から出て犬が居るであろう所へ走つていきました。

結果だけを言つと。

## 小　さ　い　女　の　子　を　拾　い　ま　し　た　。

特に他意はありません。稀里ありますといつ名前らしいです。

犬の鳴き声で集まつてきたく奴らへを片つ端から殲滅していつたら偶然見つけたので保護しました。その時に一人の中年の男の人しがみついて泣いていたのが見えたので、大体の事情は察しました。一応犬も連れて来ています。そのまま野放しにして、いつまたく奴らへを呼び寄せるか分かつたものじやなかつたので。ちなみに原作組は先まで全員寝てました。

今は一緒に稀里のこれからについて皆で相談中です。

そして私は今我々がこの住宅でのんびり相談している時も世界事情は刻一刻で変わつて行つてると実感してます。

川神鉄心と京都の本宅からの連絡です。

まずは京都の本宅ですが、要約すると非戦闘員がく奴らへに噛まれるのを阻止出来なかつたらしく、本宅にく奴らへの侵入を許してしまつたらしいです。戦闘員も何人かやられているとか。先代鶴鴨とは言つても80過ぎのジジイですから分からなくもないですけどね。とりあえず至急向かうから持ちこたえろと返しました。

そして川神鉄心ですが、こつちは分かりやすく言つと今世界中で無事な都市は川神市を除いてもうほとんど無く、川神市周辺のく奴らへも増えて本格的にキツくなつてきたから応援を頼むだそうです。

これで決まりですね。とりあえず本宅に救援に行ってから川神市に向かいます。

さて、皆に説明しないといけないから大変ですね。特に冴子とか。

## ストーカーと始まる苦難（後書き）

夕樹工…

冴子ら懲罰部隊組は絶対何かしてますねwww

そして工口描写難しいです。まったく進みませんでした。

依然ストックの状態。

今にも連投記録がががががが

そして次回夏男君は祝詞を使って京都に……

## 世界崩壊と優先される葦牙（前書き）

難産でした。

結局ストックたまりませんでした。

三人称つて難しいです。

そしてついに切れます連投記録。

明日は親の都合でおそらく投稿できないかと。  
本当にごめんなさい。

どうも鴉羽夏男です。

今冴子と一緒に京都に向かっています。

説得に失敗しました。最初は私だけで京都に向かうつもりだったのですが、祝詞を使っているから1晩もあれば十分に京都の本宅まで行つて床主に戻つてこれるので、実は大して痛手でもないのです。で、その時の説得なのですが、こういう感じになつてます。

三人称 side

床主市の御別橋の程近くにある住宅に10人の高校生ほどの男女と1人の子供と1匹の犬。

それらは今1人の子供の今後について相談をしていた。

「ありすちゃんはこれから俺達と一緒に来るということでいい?」

宮本がやさしく稀里に聞く。

「うん」

小さく稀里は宮本に返す。

そこへ今まで黙して成り行きを見ていた一人が口を開いた。

「少し聞いてほしい」

何かを相談している時はあまり口を出さずに事の成り行きを見守ることの多い彼が珍しく口を開き、ひどく深刻な声色で告げてきた。

「悪い知らせが2つほど、今先京都の本宅と川神鉄心から連絡がつた。どうちから聞く？」

男の名は鴉羽鶴鶴夏男。日本有数の名家鴉羽の若き家長であり、剣術の達人でもある。

その夏男が先ほど言った京都の本宅とは京都にある鴉羽家長の屋敷で、およそ300年ほどの歴史を持つ武家であり、独自の諜報部隊を持つことで有名である。

そして川神鉄心とは鴉羽夏男と並び武神として世界中より畏怖の対象となつて川神院のトップであり、川神学園の学園長でもある。米国と個人で不戦条約を結んでいることが有名。

夏男に比較的近い立場に居る彼ら彼女らは夏男のその言葉の意味を瞬時に悟る。あの人に知られる前に自分で何でも処理してしまう夏男がわざわざ言わなければならぬ事、それは果たしてどれほど

」とか、皆固唾を呑んで夏男の言葉を待つた。

特に川神市出身の川神百代と矢場弓子は気が気がしないのだろう。

「鉄ジイからだ」

川神百代が言う。彼女の名前から想像できる通り、川神鉄心は彼女の祖父にあたる。そしてそんな一人と近しい彼女だからこそ分かる。あの川神鉄心が鴉羽夏男を求めなければならぬ程の事。おそらく川神市のことであろう。

川神百代と同じく夏男に近しい矢場弓子も川神市からこの床主市に単身で来たため、家族が川神市に住んでいし、百代ほどではないが、同じく川神鉄心をある程度知っているので、これから夏男の言葉はあの川神鉄心が鴉羽夏男をたよらなければならぬ程の事と捉えている。

「そうだな、要約すれば川神市を除いた世界中のほとんどの都市がく奴らゝにより壊滅している。今中国やロシア、アメリカなどの國家元首が川神市に避難していて、他にも続々と到着しているらしい。そしてく奴らゝも増え続けているからこのままだと川神市が危ないだそうだ」

夏男のその言葉を聴いた全員は想像以上の事の大きさに唖然とする。

なぜなら夏男の今言った言葉は人類は滅亡寸前であると言つてている。 ようなものだから。

「本モの方はなんだ?」

いち早く正気に戻った冴子が夏男に聞く。

その瞬間夏男は苦虫を噛み潰したように顔を歪めて言つ。

「本宅はく奴らの侵入を防げなかつたらしい。戦闘員も何人か噛まれていて、対応に追われているも、まつたく間に合わなく、今にも屋敷が落ちると」

それを聞いた冴子は今度こそ言葉を失つた。

「2つの悪い知らせ。これらはあまりにも笑えない知らせであつた。

「とりあえず、これから私は京都の本宅に行くつもりだ。他の皆は一刻も早く川神市に行つてくれ」

「ちょっと待て。夏男は一人で行くつもりか?」

夏男の言葉を聞いた冴子は瞬時に問い詰める。

「ああ、私だくダメだ。一人では危険すぎる。私も行く」……

「私もだ。夏男」

一人で京都に行こうとした夏男に冴子を始め、百代や懲罰部隊組、原作組まで付いてくるといった。

「付いて来てくれるのにはありがたい。だが、今回ばかりはダメだ。京都は遠すぎる。普通に高速を使えば1晩でいけるが、今はそんなことができるわけがない、ましてや歩きでは時間が掛かりすぎる。だが私はセキレイであり、鶴鳩だ。ここから京都までの道のりを1晩

で走りきる事が出来る。だから私だ、それに川神市のこともある。おそらく川神市は今鉄心が頑張っているのだろうが、あれでももう年だ。今は大丈夫だが、そう耐えられる訳ではない。そうなれば終わりだ。だから君達には川神市に向かってほしい」

夏男が説得するも、一人で京都へ向かうの危険すぎるから、せめてもう誰か一人が一緒に行くという結論になつた。

そこでも誰が行くかでもめたが、結局祝詞を使うことで冴子に決まつた。百代ら懲罰部隊組は黒いオーラを発していて、作組の宮本も若干黒いオーラを出していた。

その後、鞠川校医友人宅を出る準備の整つた一行は川神市行きと京都行きに分かれた。

京都行きは祝詞を使って「奴ら」をひきつけながら京都へ向かい、川神市行きは何故かあつたハンヴィーに乗つて川神市へ向かう。

そして夏男と冴子は祝詞を使うために粘膜接触をする。

うなじにある鶴鳩紋から祝詞使用時の羽が現れて夏男の全身から力が湧き出し、薄い灰色の光に包まる。

それと同時に凄まじい力の奔流に周囲は風が吹き荒れ、アスファルトの埃が巻き上げられる。

そして冴子は聞く、太古のセキレイの遺伝子を通じた夏男の声を。

やがて風は止み、そこに現れたのは互いに抱き合ひ夏男と冴子の姿だった。

それを見ていた懲罰部隊組は盛大に黒いオーラを発しながら葦牙つてずるいとか思つたり思わなかつたり、初めて見た稀里は頬を赤らめていたり、原作組男性陣は夏男の体を覆う幻想的な灰色の光に魅入つていたりと割と賑やかである。

夏男は冴子の肩と膝裏に手をあて、ひょいと冴子を持ち上げる。いわゆるお姫様抱っこをする。

「な、夏男！？」

突然のことにより顔を赤らめて慌てる冴子に夏男は内心可愛いなと思つていたり、それを見た懲罰部隊組はまた黒いオーラを出したり、ついには「ずるいぞ！葦牙イイイイ！！！」と百代が騒ぎ出したり、百代止めようとしたコータが殴られていたり、ジークと名づけられた稀里と一緒に居た犬が集めてきた以上の人奴らが集まってきたりと、物凄く笑えない状態になつっていた。

「仕方が無い」

苦笑いする夏男はそう言つて冴子を空に放り上げてから刀を抜き、集まってきた人奴らを祝詞の力で薙ぎ払つて殲滅した。

「今のうちに行け」

いまだ騒いでいる川神市行きを諫めた。諫められた川神市行きは今思い出したかのようにハンヴィーに乗り込んで、先の薙ぎ払いでく奴らが集まつてくる前に川神市に向かつて猛進した。

ハンヴィーが見えなくなつたのを確認した夏男は上から聞こえるかわいらしい悲鳴を聞いて、そういえば汎子を空に放り上げたと思い出し、急いで自分も跳んで汎子を回収するのだった。

跳んで空中で汎子を受け止めた夏男はそのいきなりの逆バンジーでの涙目と上氣してほのかに赤くなつた破壊力抜群の顔を見て鼻の奥が微かに鉄の臭いに染まつた。

「はあ、はあ、よくも投げてくれたな」

逆バンジーの絶叫で息が乱れている汎子が夏男を睨む。

「く奴ら」が集まつて来ていたから仕方が無かつたのだ

「まつたぐ、夏男は。少しさ誤れ。……その、……怖かつたぞ」

あきれた様子で言つ汎子は後半恥ずかしがるよつこそつぽを向いて言つた。

「それは、悪かつた」

その反応を見た夏男は表面は誤りながらも内心可憐すぎるとか思つていた。

「まつたぐ」れだから夏男は、内心可憐いとでも思つてゐるのだろう?「う?

的確に心のうちを言つてられた夏男は動搖した顔をとつさに隠せなかつた。

「これはその罰だ」

そういう、 いまだ動搖している夏男の唇を血の滲でふさいだ。

ちなみに落丁する冴子を夏男が空中で受け止めた時から一人は祝詞の力を使って時速に換算するとおよそ  $380 \text{ km}$  の速さで京都に向かっていた。

三人称 side end

という感じで今私と冴子は京都に向かっています。そしてつい先ほど京都に入りました。早いですね。まだ移動してから  $70$  分かそこらしか立つてないというのに。

おや、 本宅のある辺りから火が上がります。これは急いでいかなければ。

アレからたつた  $90$  分しか経っていないのでおやう間に合ってはいると思いますが、 万が一があるので、 急ぎます。

そして屋敷前に着きました。

そこで私と冴子は見てしました。

ええ、見てしまったのです。

く奴らへになつてゐる父とその父に躊躇まれてゐる祖父を。

## 世界崩壊と優先される葦牙（後書き）

完全に原作から離れました。

ここからオリジナル入ります。

今この時点で各国首相は川神市へ向かっています。核弾頭は発射されません。

そしてドイツのフリードリヒ中将は今頃クリス嬢のもとにはいます。

冴子と夏男を抜いた懲罰部隊組と原作組は川神市へ向かいます。

前回のHロシーンもたいしたことが出来なかつたので、少しイチヤラブさせてみました。

ちなみに祝詞使用時の力の奔流は夏男君から湧き出る力がもれて具現化したものという設定です。早い話、初期ナートの九尾の衣の暴走なしバージョンを想像してくれれば。

そして夏男君のスペックについてですが、次回かその次に投稿します。

あと、次作は明後日か明々後日に投稿します。

そして、次回は夏男君は決断を迫られます。

## 決まる覚悟と新たな始まり（前書き）

夏男君の祝詞

我が誓約の太刀 葦牙が鬼門 斷ち切らん

能力

身体能力強化：読んで字のごとく身体能力全般を強化（約10倍）  
体力回復：精神的、肉体的疲労を全て取り除き、体力を回復させる。  
刀剣扱い：刀や剣などの刃物類の取り扱い技量が上昇（約5倍）

備考

前世の状態の夏男君の戦闘力は高校生と殴り合つて体力で負ける程度で、鶴羽様の力（鶴鴎基幹？）を手に入れた夏男君は本気を出せば2千メートル級の山を更地にすることが出来る程度。

## 決まる覚悟と新たな始まり

どうも鴉羽夏男です。

今冴子と一緒に京都の本宅に来ております。

何故京都に居るのかと云うと、実は鞠川先生の友人宅にいた時に「奴ら」の侵入を防げず、侵入した「奴ら」の対応を急いでいるもまったく間に合わなく、今にも落ちそうだとの連絡があつたからです。それと同時に川神鉄心からもそこまで深刻でなくとも似たような内容の連絡がありました。

それで私、冴子とそれ以外に分かれてもらつて、私と冴子が祝詞を使つて本気で京都まで走つてきました。その他には川神市に向かつてもらいました。

そして京都の屋敷に着いた私達が見たものは最悪でした。

「奴ら」になつた父とその父に噉まれている祖父です。

え? どういうことですか? 父上よ、あなたともあらう人が……いや、そういうえばあなたはまだ人でしたね。祖父と違つて。

てこうかジジイよ、あなたこそなにやつてるんですか？『わしは人をやめたぞおおおおおおーー』とか言って私が鶴鳩就任した直後に斬りかかってきたじゃないですか。ちなみに冴子は私の魔改造で中3の頃に人間をやめます。それとなく気の扱いを教えては居ますが、どうやらそれが気だと気付いてないようです。

まあ、教えるのは身体強化と動体視力上昇だけですけど、それでもすゞいです。木刀で木刀を斬つてました。滑らかな切断面でしたよ。もつとも私は木刀で鉄骨を切れますけどね。

まあ、いいです。今はそれよりも父です。

とりあえず父をジジイからはがします。さて、どうしますかね。父と言つても私、中身を入れると40前のおっさんですからね。今18の前世（？）21ですからね。ちょっと年の離れたお兄さんという感じでしたし、あまり父つて感じがしません。ちなみに母は3年ほど前に他界しています。

それでも肉親なのでやはり斬るのはためらわれます。

私が内心葛藤しているとジジイが父だったものを斬つてしまいました。ずいぶんとあつさりしてますね。ジジイ。なんか一仕事を終えたぜ的な幻聴が聞こえてきそうです。

あと、噛まれた右腕で額の汗をぬぐわないでください。ショールです。痛くないのでしょうか？そして血まみれの顔で近づかないでください。怖いです。

「遅かったのう、夏男」

これでも懲りました。普通なら一晩かかるところを二〇分で来ました。

「まあ、よい。見ての通り鴉羽は終わりじゃ。そしてわしももう頬がない。川神市へ逃げるんじゃ」

もとよつわのつもつです。

「悪いがここつでわしに介錯をしてくれんかのう」

今までのよつてふだけた様子はなく、真剣な表情でジジイは自分が持つていてる刀を渡してくれました。

どうしましょ。鶴鶴を襲名してからことある」とこ『勝負じゃあああああー!』とか言って斬りかかってきて果てしなく鬱陶しかつたけど、いい人なんですよ。このジジイ。昔鴉羽様の力に引っ張られてどうしても人が斬りたくて斬りたくて仕方が無いなんて事があつたんですけど、その時に私を立ち直らせたのがこのジジイですから、実は結構感謝してるんですね。そのジジイの頼みだからできる限り聞いてやりたいけど、でもそんなジジイだからこそ死んで欲しくないんですね。

わい、どうしましょ。

今私は夏男と供に京都の本宅に戻つてきている。

けれど本宅に戻つた私達が見たものはあまりにも惨状だった。昔から本宅に仕えていた使用人などの仲が良かつた人たちが皆軒並みく奴らへになつてしたり、まだく奴らへになつては居なくともく奴らへに噛まれていたり、本宅についた火によつて生きたままに焼かれている人などだつた。

そして何よりも目を疑うのはく奴らへになつた隼人さんとその隼人さんに噛まれている先代鶴鵠だ。

その光景を見て私と同様に夏男も固まつていた。

先代鶴鵠は隼人さんだつたものを斬つてから、こつちに向かつて来て、夏男に介錯をしてくれと言つた。

そういわれた夏男は俯いてしまつて表情は見えないが、おそらくいいものじゃない。昔からどこか苦手意識を持つていても大切の一人に入つていたから、だからこそ本宅が危ないのを聞いてこんなにも急いだのだろう。

先代鶴鵠は夏男をジツと見つめているが、その顔色は時間が経てば経つほど悪くなつていく。そして何かを決意したのか夏男は顔を上げた。

「これしきのこととで泣くでない、わしはそんな覚悟も無い者に12年前刀を渡した覚えはないぞい」

夏男は泣いていたのだ。僅か2粒の水滴、しかしそれは確かに夏男の頬を伝つた。

今まで夏男と供に居て、最も近くから夏男を見続けてきた私はこの時確かに夏男の『涙』を見た。

「何を言つてゐる、覚悟などとつゝに出来る」

その声を聞いた先代鶴鶴は満足した顔で背を向け、地に膝をついて脇差を取り出した。

それを見た夏男は刀を上段に構える。

上段に構えたその刀は鴉羽特有の『刀に血を付けない斬り方』で斬ったおかげか、無数の「奴ら」を斬つていたはずなのにまったく汚れがなく、綺麗な刀紋を見せた。

夏男の構えのおかげでその刀紋も燃え盛る屋敷に照らされて、まるで炎を纏つているかのような幻想的な光景を見せつける。不謹慎だが綺麗だと思つてしまつたのは仕方が無いのだらう。

先代鶴鶴は脇差で切腹をし、そして夏男は刀は振り下ろした。先代鶴鶴の頭部が首から離れ地面に落ちる。首の切断面から血が滝のように吹き上がり、全身で先代鶴鶴の血を浴びた夏男は空を見上げている。その背中は酷く小さく見えた。

「夏男」

「大丈夫だ、問題ない」

ん? 何かがおかしい。

何故か夏男の声にそれとなく喜びが含まれているような気がする?

冴子 side end

泣いてるようです、私。今生では初めてですね。

3年前の母や先ほどの父の死でさえ何も思わなかつた私ですが、ジ  
ジイの死で涙するのはやはり精神年齢的にどこか父だと思つていた  
からでしょうか?

まあいいです。今はそれよりも大変なことが。

介錯をしたはいいのですが、どうしましょうね。この興奮を。

あの後私は心にポッカリ穴が開いたような虚しさにしばらく空を見  
上げましたが、刀を振り下ろした時のこの手に感じた頸椎を断ち切  
る感触はなんともいえない快感を与えてくれます。

今までさんざんく奴ら>を斬つてきましたが、実は私、鴉羽特有の  
『刀に血を付けない斬り方』で斬つていたので、本当の意味では人  
を斬つたことは無かつたのです。

この『刀に血を付けない斬り方』は、刀に血が付いて切れ味が落ち  
るという常識を『血を付けるよりも早く刀を振れば切れ味が落ちな  
いのでは?』を理念に剣速を徹底的に上げることによって実現した  
斬り方で、斬つたときの手ごたえがほとんどなく、あつても簾巻き

を斬つた程度なので、この斬り方をしている鴉羽は本当の意味では『人を斬る』というのをしたことが無いのです。

そして今私が持つてているジジイの刀には血が付いています。ええ、私。初めて『人を斬る』ということをしました。

どうやら人を斬つたことに鴉羽様の力が反応したようです。この衝動の起因がまさか昔止めてくれた人を斬つたからになるなんて皮肉なものですね。

でも一回止められたからか、抑えられないほどでもないんですけど顔には完全に出てます。

冴子には見せられない顔ですね。

発散するには屋敷にいる「奴ら」全員を切るしかないようです。

それに今のこの屋敷の惨状。どのみち斬らなければならぬようですね。

ですが、私はジジイを斬つたことで思い出しました。

昔鶴鶴就任時に聞かされました『家長としての覚悟』

『家長たるもの。長たるな。父たれ』

先ほど言つていた覚悟とはこのことだろ？。

家長というのは上司ではなく、父である。権力に酔うことなく、父のように子が悪いことをすれば叱り、良い事をすれば褒める。皆の

父として家全体を見守る役目。それが家長である。

それがジジィが私に教えたかったことだと思います。

ならば、

墜ちた家を斬るのは

鶴鳩となり、

家長となり、

皆の父となり、

そしてセキレイである私の

役目なのではないか？

私は何処かこの第2の人生をゲーム感覚で生きていたのかも知れない。

確かに今の鴉羽などは神に便宜を図つてもらつてこの世界で生きやすくなるためのものでしたが、それだけではないようです。

この世界では確かに太古にセキレイが互いに争い、そして鴉羽様とその葦牙が生き残つた。だから今は鴉羽がある。夢や幻想などではない。確かにある存在。

私は今回のこと、今更ながらもやつと鴉羽の鶴鶴といふシステムに『鶴鶴』として『鴉羽に連なるもの全て』を守り、『鴉羽に連なるもの全て』より『愛される存在』という太古より続く『葦牙を守り、セキレイを愛する』セキレイと葦牙の絆を見出しました。

あの神のことはやはり気に入りませんが、なかなかいい仕事をしてくれます。

そのことに気付いた瞬間に今までの激しい興奮が一気にさめていつたのを感じました。

その後、今生での18年で一番に穂やかな心で屋敷内に居た全ての『奴ら』を『斬り』京都の本宅を放棄して川神市に向かいました。

さて、川神市に行つたら皆に言わなければならぬことが出来たようです。

それが私のこの世界で『生きていく覚悟』なのだと思います。

そう決めた私は以前から感じていた心の奥のしこりが取れたような気がしました。

おそらく私は今まで前世の死に対して納得してなく、私の中の時間があの事故の時から止まっていたのでしょうか。

今やっと前に進めたような気がしました。

## 決まる覚悟と新たな始まり（後書き）

。 。 。 ( ) 、 ( ) 。 。 。 イイサイシユウカイダッタナー

続きます

## 「ハグ回取り戻し開始（繪書化）

11話です。

これから夏男君達は反撃していきます。

たぶんキャラ崩壊があると思います。そして原作組はこれから出番  
がかなり少なくなるのかと……

どうも夏男です。今川神院のとある道場で錚々たるメンバーが一堂に会しています。

え？ 頭への叩打とかはありましたのか？ 当然しましたよ。

自分が神によってこの世界に送られてきた事。

前世の記憶がある事。

この世界の事。

そして神から世界改編を頼まれた事。

全部言いました。ていうか今になつて思いました。何も原作組にまで話す必要は無かつたのでは？

そのおかげで小室氏との間に少々確執ができてしましましたが。まあ、たいした問題じゃないのでいいですけどね。

なぜ彼らの知識を活かしてより多くの人を助けなかつたのだと。そんな小室氏には申し訳なくないです、とりあえず少々きつめの口調で『魔女狩り』とだけ言つておきました。小室氏は何のことだとしても言つのように首をかしげていましたが、高城後輩は確り意味

がわかつたようです。さすが天才。普通に説明は丸投げしました。これからは原作組には出る幕が無いので、たとえどのような答えを出しても私には関係ないですけどね。

まあ、そんなことがありましたが、今ここは川神鉄心を始め、私や  
黛剣聖、川神院師範代、武道四天王、九鬼家従者部隊上位やら、果  
てにはクッキー第2系体などのありえないメンバーが集まっています。  
主にこれからく奴らへをどうするかについて。

本来なら厳粛な雰囲気を漂わすはずであつた道場は今……

「クリスの安全保障のために今すぐく奴らへを殲滅するべきだ！！」

「フハハハハハハ。九鬼揚羽、降臨である」

「鉄ジイ、まだか？いつになつたら暴れられるんだ？」

「……」

「自己紹介が遅れたな。クッキー第2形態だ」

「盛つてる猿とか動物園に帰つて欲しいんですけど。アタイが身の危険感じるんですけど」

カオスだつた。

上からクリスパパ、九鬼揚羽、川上百代、黛剣聖、クッキー、まだ絶滅していない事に驚愕したガングロヤマンバの女子（？）生徒で他はといえば仲間内で取つ組み合いを始めたり、寝ていたり、酒飲んでいたりともう本当に何がなにやら。頭痛い。

え？何か変なのが混ざってる？知りませんよ。

個性ありふれた、というよりも個性しかない個性の塊のような人たちが集まつていれば超常現象の一つや二つくらい普通に起こりそうだから気にしちゃいけないと思います。そもそも私からして超常現象のような存在だし。

そしてどうやらこの場で比較的まともなのは私と川神鉄心だけらしい。

「……どうすればいいのかの？ 夏男君」

「私に聞かないでください」

ちなみに冴子は懲罰部隊組と一緒にお留守番してもらつてます。懲罰部隊組でこの場に来るのは百代だけです。原作組は言つまでもなくお留守番。そして眠いので早く帰りたいです私。帰つていいでですか？

「待つんじゃ、夏男君！この人外魔境をジジイ一人だけで切り抜けろというのか！？」

なんか帰らうとしたらしがみつかれました。ジジイにしがみつかれても気持ち悪いだけなのでやめてください。ていうかあなたが騒ぐから百代がこっちに気付いたじやないですか。

そして百代さんは何故般若がごとき形相で私のほうへ来るのでしょうか？そしてジジイは放してください。ブツブツ言っている百代の爪付き手甲攻撃を避けれない

じゃないですか。

今こも振り下ろされそつな手甲。背に腹は変えられずにジジイを盾にしてやり過ごす私。

斬られて紅い華を咲かせるジジイ。あなたの犠牲はたぶん忘れません。そして斬られても誰からも何も言われない川神鉄心憐れ。

「なあ、夏男。私達は結構な付き合いになつてゐよな。」

「そ、そうだが？」

有無を言わせない雰囲気でなお詰め寄る川上百合。怖いです。そして両手の手甲を杭のよじに使って私を畳に縫い付けないでください。普通に痛いです。

「それなのに、それなのに、それなのに、何でいつもいつも冴子が優先されるんだ？たしかに私は冴子と比べて夏男との付き合いは短いけど、私も夏男とそれなりに付き合いも長い、今まで私が夏男と何かしたいときにはすでに冴子に先を越されて結局何も出来なかつたけど、これからは素直になるぞ……そ、そうだろう？最初から我慢する必要なんてなかつたんだ。よし、夏男。私はもう遠慮はしないぞ。自分に正直なるぞ。だから……そ、その……わ、わた、わた、わたすと……その、き……キ、キ　　」

やつてる事はホラーですが、顔を赤らめて恥ずかしながらも何かを言つている。なんでしょ、このかわいい生き物は。そして手甲を杭のよじにして畳に縫い付けた私のマウンドを取つています。なにやら口を閉じて顔を熟れ切つたトマトのよじに赤らめて私に顔を近づけてきます。

「どうやら私にしがみ付くジジイを見て何かが吹っ切れたようで、ここまでされて私もさすがに分かりました。高校入学時にフラグが立っていた事は知っていましたが、ずっと放置していた付けが今回つてきたようです。」

いつの間にか静まり返っている道場。あちこちから突き刺さる視線。血溜りに沈む私とその私に覆いかぶさる川神百代。そして近づいてくる百代の顔。

「ま、待て百代。今こじだとまー むぐつーー？」

抵抗むなしく、唇をふさがれてしまいました。そして百代は私の口を無理やりあけて舌を入れてきます。

ぴちゃ、ずちや、と水音を立てて互いの唾液を交換するようなディープキス。口内を蹂躪され、唾液を吸われたと思つたら舌を伝つて入つてくる唾液。

いつの間に手甲を外したのか、爪で畳に縫い付けられたままの私の首に腕を回すように抱きついてくる百代。

静まり返っている道場に響くキスの音。いまだ回復してなく、同じ血溜りに沈んでいる川神鉄心。それに目もくれずにこちらを見る道場に居る全員。

「ふむ、これは少々気をつけねば、クリスに付かないよう護衛を強化しよー」

「ふむ、我もし素直になつてみるか……」

「……（……頑張るんだぞ、由紀江）」

「キスしていいのは、キスされる覚悟のあるやつだけだ！」

「ちよっとアタイの前でラブるとか喧嘩売つてるやつ。マスカラで目玉染め上げたいんですけど」

外野が何か言つてますが、まったく聞こえません。首に回した腕をギュッとする百代の胸とかが当たつてつぶれて、なんとも言えないやわらかい感触を伝えてきます。氣をつけないと一気に持つていかれそうです。

何時間にも何秒にも感じられる時間が経ち、離れた百代の口と私の口が銀の糸で繋がつていた。心なしかうれしそうな百代はハッキリと言ひ放ちました。

「私は夏男が好きだ。冴子には先を越されたが負けるつもりは無いからな。覚悟しておけ」

それはいいのですが、いい加減畳に縫い付けられた傷からの出血が笑えなくなつて来ます。意識が朦朧として来ました。そして襲い来る壮絶な眠気。私、寝て、いいよね。

鴉羽様は傷を塞げても失った血はビリビリようもなかつたようで、大量出血で死に掛けました夏男です。

事後報告で聞かされました。あの後の私。

眠つたというよりも氣を失つた私は緊急で医務室に運ばれて、何故か居るカエル顔の外科医に傷の縫合をしてもらいました。そこで失つた血をどうするかという話になりましたが、輸血しようにもほぼセキレイの私に適合する血液はまず無いのでどうしようもありません。もつとも縫合の時には傷も半分ほどふさがつていたし、ほぼセキレイである私は人と比べて血液が作られるのが早いらしいのでそれほどの大事でもありませんし、結局アレから2時間もしたら普通に眼が覚めました。ちなみに今私は緑色の患者服みたいなのを着ています。

眼が覚めた私が最初に見たのは冴子と百代の顔でした。今にも泣きそうな顔の百代と問題がなさそうな私を見て安堵の表所を浮かべる冴子。半泣きでやりすぎたと私に謝っている百代の頭を撫でながら大丈夫だといって泣き止せました。それを見た冴子はムツとして宣戦布告（？）をした。

「ふん、夏男はやらないぞ」

「私も負けるつもりは無い」

そんな事を言つてにらみ合う二人。そして突然乱暴に開かれる扉。

「出し抜かれました！！」

「ついやましいで候……」

医務室に勢いよく入ってきた由紀江ちゃんと弓子、懲罰部隊服。お二人ともずいです！とか私も夏男君が好きですとかこんなに大声を出した由紀江ちゃんは初めて見るし、弓子にいたつては乙女モー

ドに突入。医務室は一気にカオスになりました。

その後いろいろあつた末に由紀江ちゃんと弓子に告白をされて濃厚なディープキスをしました。

あれ？これってハーレム？

ちなみに会議の方は「実力者と国家元首に付いて来た各先進国軍によつてく奴ら」の殲滅が決まつたらしく、私が眼をさました頃には殲滅がもうすでに始まつていました。

報告書を見るとガングロヤマンバの川神学園制服を着た女子（？）生徒がマスカラ片手にく奴らの田玉を脳に届く深さで潰していく大活躍をしたとの事。

そして殲滅に行きたいのに行かせてくれない懲罰部隊組。

まだダメです！休んでいてください！と由紀江ちゃんにベットに押し戻されるし、冴子には眼を放したら夏男は勝手に行くから確り見張らないとな、と言つてベットに入つてくるし、それを見た百代も抜け駆けはなしと言つたジャマイカ！とか怒鳴りながら入つてくるし、弓子と由紀江ちゃんもそれらを見て不潔です！とか叫ぶし、おとなしく寝てこよつと思つても寝れない始末。

そんな乱痴氣騒ぎもカエル顔の外科医が来るまで続いてました。

そのカエル顔の外科医には肉体的には問題ないが、一応3日は休んでいなさいといわれました。

え？私の異常な回復力を見てどう思つたか？百代の超回復をいつも

見ているのとそれくらいでは全然驚かぬことの事。

そして今は「えられた川神院の部屋で布団の中で一人する事もなく暇をもてあましています。

あ一暇です。

でも明後日まで寝てないとまた医務室での乱痴氣騒が起らるのと、おとなしく寝る하겠습니다。

ではお休みです。

## フラグ回収と反撃開始（後書き）

今回はフラグ回收回でした。

懲罰部隊組のフラグを一気に回収しました。本来ならもう少しちょつと後でも良かったけど、まあいいかと全部回収しました。

そして何故か会議に居た羽黒黒子。マスカラ片手に父から教わったプロレス技で無双します。主に夏男君と百代のキスシーンで溜まつたストレスの発散とか。

本来ならシリアスな会議風景にしたかったのですが、書いている途中にこのメンバーでシリアスはありえないだろと思ったので変えました。

ちなみにヒュームとクラウディオは板垣家の長男と長女に絡まっています、ルーは釈迦堂と戦つてました。板垣家次女は安定のお昼寝中。三女はお留守番。

そして次回の夏男君は山を更地に……

## ナオの秘密と約束（前書き）

クオリティ低くてもみんないいぞ（――）

深刻なネタ不足に陥ってしまって。まったく筆が進みません。

すらすら書けてた8話までは懐かしい（・・・）

私は神だ。別に頭がおかしいとかではなく、確かに神と呼ばれている、それだけだ。

何処かの宗教団体に『唯一の全能神』やら『大いなる父』とも呼ばれているが、そもそも私は観測者だ。通常私の存在は知られるということは無い。それこそ何らかの不確定な要因が無い限り。

小説を読んでいても登場人物は読者のことを知る訳が無い。それと同じ事。

ならば何故知られているのかといつと、それは私が昔世界の調整役として転生させたやつが私のことを広めたからだ。たしかキリストとか言っていたな。

もっとも当時の人間にとつて私は神に見えたのだろうな。

ん?なんだ?観測者である私が何故そんなことができるのか?

観測者である私はそれと同時に崇拜の象徴たる神もあるのだ。その影響も当然受ける。そしてそれらである以前に観測している世界はすべて私が創り出したモノ。元より私には世界に干渉する権限くらいはある。でなければ転生なんて真似は元より出きるはずがない。

まあいい。そんなことより先ほど送つた男はてつきり能力系を選ぶかと思っていたが、まさか物理系を選ぶとはな、面白い。

確かに私が送った時代的に能力系では少々説明に困るから物理系を選んだのはある意味では正解なのかも知れないが、どのみち物理系でも簡単に物理法則を無視したことができるから大して変わりは無いのだがな。

だが私もそこまで鬼ではない。少し無理はあるが、一応の説明は付くようにしよう。そうだな、まずは艦船を8隻ほどおろして、あと彼の選んだものが残るようにしよう。

ふむ、しかしどうもこれが蠱毒のよつに思えて仕方が無いのは気のせいか。

まあ、それもどうでもいいことだ。

それよりも彼に約束したことだが、さすがの私もたいしたことは出来ない。これから彼女が生きようが死のうがどうなるとも私は手が出せないのだ。

歯がゆいとは思わなくも無いが、しかし何も出来ないのでからこのまま見守るしかない。彼女が生きるのかそれとも死ぬのか、それも彼の存在の大きさによるところだな。

? ? ? side

ああ、何で、何で電車事故が、何で先頭車両だけ、何で、何で、何で。

ねえ、私を残してどこに行くの？

いやだよ、あなたの居ない人生なんて。

約束したでしょ？

ずっと一緒に居たのに、何で私を置いていくの？

ねえ、私も連れて行つて。

あなたの居ない人生なんて嫌よ。

嫌、嫌ッ！

どこに行くの？

私を置いてかないでッ！！

待つて、今行くから置いてかないでッ！！

今、行くから

? ? ? s . i d e e n d

ふむ、やはりこう来たか。まあ、半ばこうなるだろうとは分かって

いたが、さてどうすればいい、約束もあるしな。

仕方ない。呼ぶか

「 やあ、始めまして、だな」

「 ……だ、れ？」

ふむ、これは予想以上に重症だな。それほどに存在が大きいか、まったく愛されているな。

これなら問題ない、か。だが一応聞いてみるか。

「 誰でもないさ、それよりもここに来たということは何か強い願望があるはずだが？」

嘘も方便という。すまないがここは騙されてもりあつ。

「 い、いは……どい？」

「 ん？ ここか？ ここはどこでもないさ、ただ今ここは私と会つているところとは何か叶えたい望みがあるはずだ、言つてじりじり」

「 望み……」

「 わうだ、君の中にあるはずだろ？ 強い願望が

「 強い、願望」

「 そうだ、それを私に言つてみるのだ」

「……ずっと、一緒に 居る」

「そうか」

聞かなくとも良かつたが、それでも一応彼女の意思を聞かなければ  
な、そういう約束もあるからな、これで心置きなくなつた。

しかし、一つ困ったことがおきたな。彼は力の関係で肉体そのもの  
を作り直したからいが、彼女はそうは行かないから肉体が無い。  
別に肉体が無いことがそんなに深刻というわけでもない。魂をその  
まま輪廻に回せばいい。ただ、それでは記憶がなくなつてしまつ。  
彼に近しい存在として生まれることばかりから都合をつけないと  
ができるが、記憶が無いと必ずしも彼と供に在るとは限らなくなる  
から、それでは約束を違えることになつてしまつ。さてどうしたも  
のか。

「ねえ、本当にまた一緒にいれるの？ねえ、答えてよ

見た限りでは思いは相当強い、これはおそらく輪廻を通しても問題  
ないとは思つが、如何せん確証がない。

「ねえ、つてば、ちょっと聞いてるのー？」

少々不安があるが、まあこの状態なら大丈夫か。

「ああ、出来る」

「本当ーー？」

「ああ」

また彼に会えると分かつた瞬間にこの笑顔が、これは記憶のことは教えない方がいいのかもしれないな。

「また、会える。うん、また」

「輪廻を回つてもう一度最初から人生をやり直すことになるが、彼とは近しい存在に生まれるよう此方で都合をしよう」

「ずっと、一緒、また」

聞いてないな。まあ、いい、送るか。

「用並みの事しか言えないが、お幸せに」

「また、また！」

さて、これで半分は約束を果たしたことはになるが、後半分は正直運に頼るしかないな。

まあ、いい。賽は投げられた。なるよつにはなるだろつ。

最大限の補助はしたからな。

ああ、私は今幸せを教授している。先天的要因によつて妊娠をしてもかなりの難産になるといわれていて、最悪子供と母体のどちらかを見捨てなければならないとも言われたが、先ほど主治医から出産が終わつて、子供、母体共々無事だと教えられた。

そして今我が子をこの手に抱いているが、妻に良く似た可愛い女の子だ。目元なんかもう妻にそっくりだ。

ああ、そうだ。名前は前から決まつている。

この子の名前は冴子だ。

我が毒島家に生まれてきた最初の子。

毒島冴子だ。

? ? ? s.i.d.e end

## 生まれの秘密と約束（後書き）

前世の彼女救済回でした。

自分で書いておいて神は約束したけど、ろくに干渉もできないのにどうやって幸せにするのかがずっと疑問でした。

その割りには結構干渉してる気がしないでもないが。

彼女の中での彼の存在はかなり大きく、もはや依存している状態だつたため、彼を失った彼女はその後すぐに彼を追う形で自害をし、そしてそれを見ていた神は彼との約束もあって彼女を転生させようとしていますが、彼女の場合は彼とは事情が違うので輪廻を通してでの転生をするしかも、そうする場合記憶が消えてしまうが、彼女の彼に対する思いを直に見た神はおそらく大丈夫だろうと彼女を彼に近しい存在に転生させます。

そして転生した結果……

2011/8/21 誤字修正

理不尽な暴力と本領發揮（前書き）

1ヶ月も大変長らくお待たせしました。

交ざり気のない群青色の澄んだ空の下、気温の変化から発生した霧に包まれた早朝の川神院の境内にて黒いサイハイブーツに黒地の袖に、白いラインがある裾が短い振袖を着ていて、その上に灰色の羽織を肩に引っ掛けた、まさに黒を表すような姿をしている目の細い男と、上下を緑色のジャージで固め、黄色のいたって普通に市販されているスニーカーを履いた中国風の、こちらも細目の男が川神院境内に敷き詰められた砂利を踏みしめる独特の音を発しながら真ん中にある本殿はさんで西側の端にある道場を目指して歩いていた。

「いまはどういう状況だ」

黒い男 鶴羽夏男は問う。

「最初は目覚しい戦果を見せたけど、それだけで、後はこれといった成果は出でないね」

たいしてそれに返すのは上下縁ジャージを着た細目の男。名前はルー・イー。この川神院に昔から伝わる川神流武術の師範代である。

「で、各國元首についてきた軍はどうした？集めれば最低でも大隊程度の数はあるはずだが？」

ここでの鶴羽が言う軍とは突如世界で同時発生した原因不明のゾンビ化した人間により、この川神市に避難してきた国家元首と供について来た特務部隊のことである。

「それが貴重な弾薬を温存しておきたいと言つて動かないネ」

鴉羽はその軍の行動についてルーに聞くが、ルーから帰つてくる返事は芳しくないものだつた。そもそも何故鴉羽がルーに聞いているのかといふと、それはただ単に3日ほど前にこれから向かう道場で開かれた川神防衛会議にて発生したハプニングにより、怪我を負い、その療養で会議の翌日に行われた「奴ら」の討伐に参加できず、3日経つた本日に担当医から許可が出た所で、それにルーが同伴する形で防衛本部となつた川神院の道場に向かつてゐる。

「…………なるほどな、高みの見物つてか。目出度いね。未だに自分達のが立場が上だとでも思つてゐんだらう。なあ、ルー？」

最初から期待していなかつた鴉羽だが、まさかここまで事態収束後の下心が見え透いた酷い言い訳をしてくるとは思わなかつたらしく、呆れた口調で心のうちを告げる。

「もう少しオブラーートに包んだ言い方をするね」

同意を求められたルーは一応鴉羽のあまりに直接過ぎる批判を諫める。

「まあいいや、元からやつらをあてにはしてない。それに自惚れていふといつわけではないが、600程度など十分補つことが出来る」

その後鴉羽は何も言つことはなく、一人に妙な沈黙が下りたまま道場にたどり着いた。

フフフ、今日であれから3日。ついに本氣で暴れられるよになつた鴉羽夏男です。今から楽しみで楽しみで仕方が無いです。

いやあ、今ルー師範代と一緒にいつの間にか川神市防衛本部と化した川神院の道場に向かっております。その途中でとりあえず今の戦況を聞いてみたんですけど、どうやらあんまり進んでないらしく、依然厳しい状態であることに代わりはないと言つてました。

まあ、川神市も大きいですからね、いくら質が高かろうとも1000と900と20ちょっとでうん十万も、うん百万もある「奴ら」を相手取るのはさすがに厳しいようです。といつよりも、これほど数に差があるのにそれでも防衛ラインを築けている時点で異常です。相手の総数は観光客や不法滞在者も入れて最低でも1億3千万人を考慮すると部が悪い所の話じやありませんね。

もつともそんな数など関係ないという存在も居るには居るのだが、高齢のご老体だつたり、怪我で3日ほど寝込んだりと不幸が重なつて結局厳しい戦況を強いられているというのが現状ということです。

各国元首についてきた軍の奴らも集めれば一個大隊くらいはあるから結構な戦力にはなるんですけど、こつちは端っから期待してません。練度も低いし動きもとろい、戦場に居られるとはつきり言って邪魔です。それに先ほどの返答を聞く限り、彼らは未だに自己の利益を最優先で悠長に責任の在り処という不毛な言い争いをしているらしいですし。

此方が1920程度なのに対し、相手側は最低でも1億3千万。その差が実際に約67708倍もある現状では600とはいえ、その戦力はなくてはならないものである。と向こうは考えているが、実際は有ればそれに越したことはない。しかし、どうしても欲しいかといわれれば、そうともいえないという果てなく微妙なもの。

現代では戦略兵器などという、一発のミサイルで戦争を終わらせられることから忘れられがちだが、通常戦いというのは、相手より多くの数をそろえたほうが有利であるというのは定石である。そう考えれば彼我の差が実際に6万8千倍もある今は戦いにもならないのは火を見るより明らかなのだが、その理論にはいくつかの前提が必要である。

相手とこちら側の『数』以外の条件がほぼ同じであること。

相手に理性があり、考えることができる」と。

そして、何よりも相手が生きていること。

およそこの三つの前提がなければ成り立たないので。今回はこちらは武器があつて、向こうは生身のしかも動きが遅い、数だけの集団。そして「奴ら」になった人間は生物学上、生きては居ない死んだ状態である。当然死んでいるのだから理性はなく、考えることは出来ない。ただ音のする所に向かつて移動し、音を発する生物を喰らう。それだけ。

1億3千万と1920。数にすればはつきり言つて自殺行為だが、この1920という数はそれこそ一人一人が人間とは思えないほどの『力』を持つ、いわば化物集団なのだ。1億は無理ともこの町に

集まる数百万程度ならば少々厳しいが、滅ぼせないことはないのだ、何よりもここには人外が2人に入をやめかける人が10何人いるのだから。

だからこそ各国首脳の思うほどに、自分達の存在は重要ではない。このような事態が起こった今、国という後ろ盾は意味を成さない。だからこの川神市で何をやろうとも自由だが、あまりにも鬱陶しければいつでも切ることができる。所詮はその程度でしかない。

目立った動きはないが、水面下では此方の動向を嗅ぎまわっていることは全て分かっている。別にそれで此方を何とかできるわけではないが、鬱陶しくはあるから少し脅しをかけておくか。

それにたぶん『彼ら』も見ているだろうから、今日は少し頑張つてみよう。

ちなみにフランス中将の部隊はエーベルバッハ少尉を始め、全体の戦闘力が非常に高い集団でもあるからということで、この川神市周辺の「奴ら」の討伐には欠かせない一角でもある。

夏男 side end

川神院の宿舎に泊めてもらっている今、本来なら見張りをする必要はないが、先日言われたことが頭から離ず、夜も眠れないからベランダに出て冷たい空気に当たる小室とそれについてきた形の平野はやることもなく双眼鏡やスコープで周りを見ていて、そろそろ7時

にならうかといつときにそれは起きた。

突然川神市の北西のほうから突風が吹き荒んだかと思つたらドオオオオンツツ！…という凄まじい爆発音がして、その爆発音と連動するかのように地鳴りがした直後にガタガタガタ、と地面が上下に細かくゆれ、しばらくすると前後左右にゆるく円を描くようにゆれ始めた。

「じ、地震？」

「……お、おい見ろよ、小室」

ちょうど先ほどの突風が起きた方角をスコープで見ていた平野は先ほどの地震で小室がベランダの床に落とした双眼鏡を拾つて小室に自分が見た方角を見るように促した。

「嘘……だ、る……」

「今の音は何……」

今しがたの轟音と地震でベランダに飛んで来た高城は何事かとベランダにいた一人に声を荒げながら聞く。

「や、山が……」

「あ、あれは鴉羽先輩ツ！」

「ちよつと貸しなさいよ小室！」

そこで高城が双眼鏡越しに見たものは、山崩れでも起したかのよう

にごつそりと削り取られた山とそれに巻き込まれて生き埋めになつてゐる「奴ら」と運よく生き埋めにならなかつた「奴ら」を百代や冴子と一緒に鬼神の如く切り倒している鴉羽の姿だった。

## 理不尽な暴力と本領発揮（後書き）

これから暴れていきます夏男君です。

各国首相は全ての騒ぎが終わつた後に失つた自分の地位の確保のために責任の在り処の追及を川神か鴉羽に押し付けるつもりです。

そして今回は夏男君がお前らこれ以上調子にのつてつと弔詞を送つてやつぞ的な牽制をする意味で山を半分ほどバターのよつてに切り取りました。前からやるやるとも言つてますしね。

番外編・もし夏男くんがセキレイではなく超能力者だったら（前書き）

今話は少々鬱成分が含まれております。苦手な人は閲覧にご注意下さい。

## 番外編・もし夏男くんがセキレイではなく超能力者だったら

私は異常だ。物心の付いたころから私の周りではよくおかしなことが起きたりする。

それはテレビが突然付いたり、消えたり、夏場に暑いなと思った瞬間にクーラーが勝手に付いたり、友達とかくれんぼをしている時に柱の向こう側に友達は居ないかなと思った瞬間に柱が消えて隠れる友達が見えたり、砂場で遊んだ時に友達がふざけて作った膝まで位ある深さの落とし穴に嵌つて砂場に転げたのにまったく体に砂が付かなかつたり、海に行つて溺れた時も苦しいはずなのに何故か呼吸できたりと気付いたら私の周りには不思議が溢れていた。

幼稚園の時は友達も珍しがって、羨ましがられていた。それもそうだ、幼稚園児にとっての日々は今日この子とこれして遊んだ。じゃあ、明日はあることああして遊ぼう。何も縛られずに気の向くまま、風の向くままに友達と遊ぶ幼稚園児にとって僕の身の回りに起る不思議はただただ便利に見えたのだろう。

しかし、それも年がたつごとに変わってしまった。

今までの友達と一緒に別の場所から來た知らない人たちもいる学校。今までの付き合いがある友達は見慣れているから大して何も思わないが、しかし、それがまったく別の それこそ他の地域から來る同年代の子供達や新しい先生はどう思つのか。

最初こそ何も知らない、私を普通に、一般と同じだと思つていた彼

らは私の不思議を知つた当初は戸惑い、そして気味悪がり、嫌悪し、最後は迫害。

人というのは自分達とは違う別の何かに対して非常に敏感であり、また酷く嫌う。

始まりは小さい、本当に小さな意地悪だつた。クラスメイトの一人が休み時間の時に私の教科書を私の隣の人の机の中へかくしたのだ。休み時間友達と一緒に校庭でボーリで遊んでいた私は帰ってきた時に机の中に入っていたはずの教科書がないことに疑問を覚えて、机にしまい忘れたのかと思つて鞄を見てみるとその中に新品同様の教科書があつた。

今から思えばわたしはこの時から無自覚に『能力』を使つていたのだろう。

私の教科書を隠したクラスメイトは当然そのシーンを見ており、教科書が一つあつたのかと悔しがり、その次の授業では鞄の中身も確認して今度こそはとまた隠すのだが、結局また鞄の中から新品同様の教科書が出てきた。その後も何回も何回も似たような手口で物を隠すも、どこからか隠されたものの新品同様に綺麗なものが出てくるのだ。

それをおかしく思つた友達はやがて気味悪く思つよつになり、それが周りに伝染し、さらには幼稚園の時からの友達でさえ気持ち悪く思つよつになつて、やがて私は孤立して行つた。

気がづいたら私は一人だつた。

皆から気味悪がられ、まるで腫れ物のように扱われ、あまつさえ親にまで忌避されるようになつた。

小学校も5年に上がつた時の夏だらうか、その時学校では完全に孤立していた私は当然友人と遊ぶなんてことはなく、学校終わりと供に家路に着いた。

そして家に帰つたとき私が見たのは何もない、家具も、カーテンも、クーラーすら付いてなかつた文字通りのもの抜けからになつていた。

そんな何もない家に手紙が一通だけポツリとおいてあつた。

君のその力はあまりにも気持ち悪い。私達夫婦は今まで耐えてきたが、もう我慢できない。君をこんな形で棄ててしまうことは非常に心苦しいが、私達にはもう君を育てることは出来ない。だから私達夫婦は出て行く。

要約するところ書かれていた。

要は実の親にさえ棄てられ、拒絶されてしまったのだ。

棄てたといつても、それでもほんの僅かでも親心が残つていたのか事前に僕の保護先を施設に依頼していた。親権の放棄も何もかもの法的手続きを済ませていたようで、その日の夜に来た施設の役員に私は連れて行かれた。こうして私は施設に入った。

施設に入つて少し、私は自分の身の回りの不思議が『能力』であることを十分自覚できるようになつていし、この『能力』の制御の仕方も本質も何もかも全て分かつた。

だから施設では『能力』のことは知られることはなく、少し変わった子という印象を持たせることが出来た。

そこで私はやっと初めて普通の日常、友人に囲まれた日常というものを知ることが出来た。

この日常の大切さを一度失ったことがあることで分かる、非常に危ういものである。私を棄てた親については今更どうこうしてほしいとも思わないし、したいとも思わない。むしろ感謝している。

そう、私は今、昔私を棄てた親に感謝している。

なぜなら私はこの『能力<sup>ちから</sup>』で最愛の人の心を守ることができ

あれば施設に入つて、近くの中学校に入ったときのこと。

入学式で偶然見つけた一人の少女。少女というにはあまりにも大人びた姿でいて、美しい姿だった。

一瞬、ほんの一瞬ではあつたが、グラウンドに張り出されたクラス分けの看板を見に行つた時に目が合つたのだ。そんな彼女を一目見た瞬間に私は全身に電撃が走つたような衝撃に襲われた。その瞬間に分かつた。私は彼女に惚れたと、一目ぼれだと。

混ざり合う視線は本来なら、一瞬の出来ことだつたが、その一瞬が何秒にも、何十秒にも、何分にも感じられた。

刹那の視線の絡み合いが終わつた時、気が付いたら彼女はいなくな

つていた。

私はまるで何かに取り付かれたかのように看板を見て彼女の名前を確認しようとしたが、看板の前まで来て、そういうえば彼女の名前を知らなかつたと思いつつして酷く落ち込みもした。

結局その後も彼女のことが頭から離れなかつたが、何時までもグラウンドに居ても埒が明かないのと、私は看板に自分の名前が書いてあつた教室に向かつた。

そこで見たのは先ほどの彼女。何処か近づきがたい雰囲気を放つて、いる彼女に私は少し気おされたが、ちょうど席も隣だつたらしく、私は自分がこれから1年間使うことになる予定の席に向かい、気を取り直して彼女に名前を尋ねてみた。

私が声をかけると、彼女はその長い青み掛かった美しい黒髪を揺らしながら振り向いた。

彼女に名前を尋ねると、彼女はこう言った

毒島冴子と。

今私の目の前には木刀片手に泣きじゃくる毒島冴子と地面に倒れこむ血まみれのサラリーマンらしき中年男性。

「楽しかつたのだ。明確な敵が得られたこと、それは悦楽そのものだつた。木刀を手にした私は圧倒的優位にいると知つて怯えたフリをして、男の動きを誘い、ためらつことなく逆襲したッ!!

楽しかった、

本当に楽しくてたまらなかつたツ――

それが、眞実の私

毒島汎子の本質なのだツ――

ただ力の酔いしれ、楽しんでいた私が少女そのものの真心を抱くな  
ど許さ――

「もういい。もう、いいんだ」

ああ、彼女は今自ら罪悪感につぶれかけている。これ以上放つてお  
けば彼女の心は間違ひなく壊れる。

そんなことはさせない。私がさせない。こんな私でも、こんな私で  
も一人の少女の心くらいは守つて見せてやる。

また親に棄てられたように、彼女にも棄てられるかもしれない。でも  
それでいい。一人の少女の心を守れるのなら、私はどれだけ傷つ  
こうともかまわない。それが『人』<sup>かのじょ</sup>を好きになつてしまつた『化物』<sup>わたし</sup>のせめてもの願い。

だから今、心優しい彼女に私の全てを話そう、たとえまた棄てられ  
ても彼女を救えたという事実だけで私はなんとか生きていく。だ  
から話そつ。

「何<sup>お</sup>、見てくれ――……それ、は――

「うん、これが本当の私。昔から私だけにあった『能力』、本物の化物だ」

私は自らの『能力』<sup>ちから</sup>を全力で開放した。開放された『能力』<sup>ちから</sup>を象徴するかのように背中に三対六枚の白い翼が現れる。

施設に入つたすぐにこの『能力』<sup>ちから</sup>の本質を理解した時に現れた翼。

背中からとてつもない、目に見えない圧力を放つて三枚六対の翼が現れると同時に周囲の空間が一変する。

その空氣に飲み込まれたかのように冴子は目を丸く見開き、口もポカンと開きっぱなしだった。

「このように私の『能力』<sup>ちから</sup>はこの程度のアスファルトやこの周辺にある建物をいとも簡単に破壊することができる。それこそ砂場の砂で作った城を壊すような気軽さでね。こんな『能力』<sup>ちから</sup>を持つての私はほんがよほど化物だろ？それに知ってるか？私の、ち、からは……軍隊ですら簡単に、ね、ねじ、ねじ伏せることが、で、きる、んだ」

何で？何でだ？彼女を救うためならば、たとえどれだけ嫌われようとも、蔑まれようとも、拒絶されようと覚悟は出来てるはずなのに、何で、何で涙が止まらないんだ、どうして、いつも嫌われるのが怖いんだ、どうして、どうして、

。 どうして いつも胸が痛むのだ

「だから、君は、私と違つて化け  $m$  「もういいッ！」……これ以上言うなッ！……もう、分かつたから、もう」

話してゐる途中で彼女に逆に抱きしめられ、逆に止められた私はそのまま彼女は抱き合つて泣き続けた。鳴き続けた。

初めて受け入れてもらえた。そう思つだけで何故か心のおぐが物凄く暖かくなつて、涙が止まらなかつた。

その後、全てをさらけ出して、初めて受け入れてもらえた私はより毒島さんのことが気になつていて。朝も昼も夜も、飯を食べる時も寝る時も、いつも毒島さんのがより頭から離れなくなつて、気が付いたらいつの間にか恋人になつていた。

そして世界が壊れた今。何もかもが昨日とは、先とは違つ今この世界、この世界で私は最愛の彼女を守るために親から貰つたこの『能力』<sup>ちから</sup>を振るおう。この『未元物質』を。

番外編・もし夏男くんがセキレイではなく超能力者だったら（後書き）

番外編のもしもシリーズ第2弾のダークマターでしたwww

いや実は私、ダークマターは戦闘において一級品なのはもちろんとして、日常においては下手したら貨幣という概念が要らないほど便利だと思うんですねwww

ちなみに今話の夏男くんはダークマターと演算能力をもじった代わりに記憶を失いました。という設定

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7471u/>

---

学園默示録 HIGHSCHOOL OF THE DEAD-黒い鶴鳩-

2011年10月2日11時37分発行